

理学療法士の活動



東京2020オリ・パラ大会から理学療法士の未来に向けて



オリパラレガシー編集作業部会 編集

2022年3月



目 次

<大会組織委員会>	3	柔道	24
		パワーリフティング	25
<選手村診療所>		射撃	25
選手村（準備期間含）	5	シットティングバレーボール	26
晴海	7	卓球	26
分村：大磯	8	テコンドー	27
分村：修善寺	9	車いすバスケットボール	27
分村：河口湖	10	車いすフェンシング	28
		車いすラグビー	28
<競技会場 オリンピック>		車いすテニス	29
陸上	11	ローイング	29
水泳	11		
サッカー	12	<日本代表選手団本部>	
ボート	12	オリンピック	30
ホッケー	13	パラリンピック	31
バレーボール	13		
体操	14	<日本代表選手団 オリンピック>	
バスケットボール	14	空手	32
ハンドボール	15	水泳競泳	32
フェンシング	15	水泳飛込	33
柔道	16	ハンドボール	33
バドミントン	16	フィールドホッケー	34
カヌー	17		
アーチェリー	17	<日本代表選手団 パラリンピック>	
ゴルフ	18	カヌー	34
野球・ソフトボール	18	車いすラグビー	35
スポーツクライミング	19	車いすバスケットボール（女子）	35
空手	20	シットティングバレーボール（女子）	36
サーフィン	20	陸上	36
スケートボード	21	ゴールボール（女子）	37
		車いすテニス	37
<競技会場 パラリンピック>			
アーチェリー	21	<その他>	
陸上	22	JPC村外	38
カヌー	22	日本スポーツ振興センター	
サイクリング	23	村外サポート拠点	39
5人制サッカー	23	ドーピング	40
ゴールボール	24	海外対応（ジャマイカ）	41



大会組織委員会

札幌医科大学

横浜市スポーツ医科学センター

八王子スポーツ整形外科

片寄 正樹

玉置 龍也

遠山 美和子



オリンピック・パラリンピックにおけるアスリートの治療ケア、コンディショニングそしてリカバリーに関わるサービスは、IOC により Physiotherapy & Physical Therapies services (以下 PT service) として定義されている。関わるスタッフも選手村ポリクリニックにおける理学療法士、マッサージ師、はり師、そして競技会場における理学療法士、マッサージ師、アスリートケアアシスタントである。我々 3 名の理学療法士は、Tokyo2020 大会組織委員会の職員として、他職種連携で運営される全ての Physiotherapy & Physical Therapies services のマネージを IOC PT representative の Dr Marie-Elaine Grant と共に担当した。(写真)

片寄は 2016 年より IOC、IPC、IF、そして NOC/NPC 医療関係者との調整責任を担う組織委員会 chief physiotherapist を本務とし、大会時には選手村 Polyclinic Deputy Operation Manager を兼務しポリクリ医療全体のサービスマネージメントを担当した。玉置は 2017 年より Deputy chief physiotherapist としてポリクリ PT service を統括し、遠山は 2018 年からオリンピック 33 競技、パラリンピック 22 競技すべてにおける PT service の調整整備に奔走した。我々の赴任からパラリンピック競技大会選手村が閉村した 2021 年 9 月 8 日までの間を振り返れば、本当に多くの人々に支えられたことだけが思い返される。対外調整そして組織委員会内のマネージに奔走していた我々に正面から向き合い支えていただき、そしてすべての実務マネージを担当してくれた 19 名のコアメンバーには、言葉も見つからないほど感謝の気持ちで今も胸が詰まる思いである。

Covid-19 対策を必須としながらも、国際競技に参加するアスリートへの医療展開は、外国語でのコミュニケーションの必要性に加えマルチカルチャーそしてダイバーシティの受容が不可欠であり、グローバルスタンダードを意識したサービスクオリティを確保する必要があった。そのための人材確保と研修に日本理学療法士協会が全面的に協力してくれたこと、そしてそのための全国的なネットワークを構築していただいたことは大会運営を支えていただいたのみならず Tokyo2020 legacy を生み出していくためのネットワークとしても大きな期待を持っている。

大会期間中には、790 名の理学療法士が会場医療で、そしてポリクリでは 153 名の理学療法士が集結し活躍した。ポリクリは、組織委員会推薦のコアメンバーと日本理学療法士協会推薦スタッフの混成チーム、会場医療のスタッフは日本理学療法士協会と各競技団体からの被推薦者の混成チームであったが、いずれも全国から集結し活動が展開された。日常診療ではあまり経験しない他施設スタッフの臨床を目の当たりにすることに加え、その臨床共有と情報交換は新鮮であり、その意義を深く理解するに至ったことは、誰もが感じた参加者の心に残る大きな Legacy になったと思う。また日本の理学療法が、世界の理学療法サービスを知るハイパフォーマンスアスリートに高い評価を受け、IOC そして IPC からそのレベルの高さを称賛された。このことは我々日本の理学療法士が気が付いていない事実であり、大きな自信と更なる発展にむけてのモチベーションにもなったものと思っている。

一方で、多くのアスリートそして関係者から、「日本の理学療法が、高度で繊細で非常に優れていることを知らなかった」とする声が多かったの



も事実である。ここに日本の課題、これからの Legacy 構築の大きな種が存在していると強く感じている。誤解を恐れずに表現するならば、グローバルなコミュニケーションに日本のスポーツ理学療法が参戦できていないことを意味すると思っている。ハイパフォーマンスアスリートがグローバルコミュニケーションの中で活躍する時代において、そのメディカルサポートを担うスポーツ理学療法のグローバルコミュニケーションは不可避であり、当面の重要課題として積極的に取り組むべきターゲットといえるのかもしれない。組織委員会内で PT マネージを担当していた我々 3 人がいつも苦しめられていたのは、グローバルスタンダードを理解しつつ日本の現状と調整しコンセンサスを確保することであり、この調整を英語コミュニケーションにより推進できる人材が我が国では少ないことである。グローバルスタンダードは、アカデミックエビデンスを基盤としたクリニカルスキルがベースであり、そしてそれを前提としたオペレーションマネジメントができるグローバル人材は極めて貴重だと思う。今回の大会経験者全てがこのことに触れ、実際のマネージで苦慮した経験はこれからの日本のスポーツ理学療法の発展に大きく寄与するものと言え、このベクトルを一つの Legacy とできるのではないかと感じている。

そのためにも、IFSPT が推進する国際スポーツ理学療法士の認証や、様々な国際学術誌への投稿の加速化を進めるとともに、何よりもこのようなグローバルな視点を持ちつつ国内でローカルに実践されるスポーツ理学療法最前線への応用などを推進する体制構築が、これからの Legacy 構築に大きな影響をあたえるものになることを強く想起させてくれた大会でもあった。

Covid-19 の影響を受け 2021 年への開催延期となった Tokyo2020 大会は、本当に多くの対応に迫られ、様々な課題を克服しながら終了した。スポーツ医療に関わる専門職のグローバルアイデンティティ、そしてこれら専門職連携による様々な可能性を再認識させてくれたことも大きい。また、ポリクリニックや競技会場に全国から参集した医療スタッフによる診療は、日々発生する課題に現場力で解決をみいだす連携と連帯を醸成する最前線ともなったと感じている。大会終了からの時間の経過とあわせて改めて冷静に大会運営を振り返り、様々な課題を整理した上での Legacy 構築も必ず必要になってくるものと思うが、多くの legacy 構築の可能性をみた大会であったと今は振り返っている。

最後に、大会運営においてお世話になった全ての皆様に、改めて心からの感謝をお伝えしたく思う。ありがとうございました。



選手村診療所
オリンピック・パラリンピック
選手村（準備期間含）

日本女子体育大学健康管理センター
板倉 尚子



私はロンドンオリンピック（2012 年開催）では日本選手団本部医務班として参加し、リオデジャネイロオリンピック（2016 年開催）では村外に設けられたハイパフォーマンスサポートハウススタッフを担当した。これらの経験を経て、本大会ではホスト国として選手村内総合診療所（ポリクリニック）理学療法サービス部門コアスタッフとして大会準備・運営に携わった。また、日本理学療法士協会内のスポーツ関連事業担当部署であるスポーツ支援推進執行委員会（2017 年度～2018 年度）、2020 東京大会推進委員会（2019 年度～2020 年度）での役割も担い、オリ・パラ大会に参加する理学療法士の募集および推薦から人材育成にも関わった。「オリンピック」が持つ強烈な輝きとパワーの中で、世界最高峰となる大会で競う選手を目の当たりにした理学療法士には、日本の理学療法を大きく動かすモチベーションが芽生えるとの確信があり、特に「パラリンピック」ではパラアスリートの身体能力に驚愕し、障害に対する考え方と日々の臨床の中で設定しているゴールに疑問を感じ始めるのではないかとの思いがあり、準備段階から熱い活動を展開してきた。残念ながらコロナ禍の影響を受けて選手村の大賑わいの華やかさは控え目だったが、それでも選手は陽気で明るく選手村内は輝いていた。オーストラリア選手団宿泊棟に掲げられた「心より感謝します」の垂れ幕を目にした時は、大会開催を待ち望んでいた選手の気持ちが伝わり、開催を決断した関係機関に改めて感謝の念を感じた。大会参加までの準備期間では日本理学療法士協会が計画していた実技研修会はコロナ禍の影響で対面開

催が出来ず、十分なスキルの準備やチームビルディングなどがないまま会員を送り出してしまい、育成担当者として不安材料が満載であった。しかし、ポリクリニックリハビリ室に配置された理学療法士が来室した選手・役員にもおじすることなく積極的に理学療法を提供する姿をみて、私の心配事は取り越し苦労であったと理解した。リハビリテーション室は午前（7 時～16 時）・午後（14 時～23 時）の2シフトが生まれ 14～17 名のスタッフが交代で担当し、各チームのマネジメントを 2～4 名のコアスタッフが担当した。初対面のスタッフで日々入れ替わりがあり、不慣れな環境で、時間的にも体力的にもハードワークな活動であったと思うが、それぞれが自分のポテンシャルとキャラクターを存分に発揮してチームワークを築きながら、明るく良好な活動環境が整えることができたのではと思う。課題と感じたのは、やはり女性理学療法士が不足したことである。女性理学療法士の対応を希望する選手・役員は多く、女性スタッフは大忙しの状況であった。スポーツ領域での女性不足は長く課題とされてきており良い解決策を講じる必要がある。オリンピック・パラリンピックが発する強烈なパワーと輝きを多くの理学療法士と共有し、またスポーツ理学療法の臨床現場を共にできたことは、私自身にも大きな財産になった。ポリクリニックで活動を共にした理学療法スタッフの皆様はこの場をお借りして御礼申し上げるとともに、オリンピック・パラリンピックでの経験が、日本の理学療法の発展に活かさせることを期待します。



選手村診療所
オリンピック・パラリンピック
選手村（準備期間含）

八王子スポーツ整形外科

佐藤 正裕



2013年9月7日（日本時間8日早朝）、アルゼンチンのブエノスアイレスで開かれていた国際オリンピック委員会総会でオリ・パラ大会の招致が決定した。私はリアルタイムで視聴した瞬間から大会に関わりたく強く思い、大会までどう準備をしようかと考えていたことを思い出す。

大会組織委員会からの推薦をいただき、私は理学療法部門コアメンバーとしての任をいただいた。大会組織委員会メンバーとコアメンバーでミーティングを重ね、事前準備ではスタッフ採用面談や物理療法機器の調達準備、開催直前の現地リハーサルや現地講習などに従事した。特に採用面談では、日本全国の理学療法士がとても熱い気持ちでオリ・パラ大会参加に向けて活動していることを目の当たりにし、私としてもモチベーションが上がる素晴らしい機会であった。

2019年の新型コロナウイルスのパンデミックにより大会が1年延期となったため、大会開催期間は、オリ大会が2021年7月23日～8月8日、パラ大会が2021年8月24日～9月6日となった。大会期間中、私は晴海本村と修善寺分村の選手村総合診療所（ポリクリニック）における理学療法部門のコアメンバーとして従事した。ポリクリニックの開設期間は、オリ大会は2021年7月13日～8月11日（修善寺～8月10日）まで、パラ大会は8月17日～9月8日（修善寺～8月29日）までであった。私は、オリ大会22日間（晴海12日間、修善寺10日間）、パラ大会5日間（晴海1日間、修善寺4日間）の合計27日間参加した。ポリクリニックの運営時間は7時～23時までで、理学療法部門のメインサービスとして、理学療法（物理療法・徒手療法・運動療法）、アイスパス、スポーツマッサージが利用者に提供された。理学療法部門の人員は2交代シフト制（前半7時～15時、後半14時～23時）で運用され、事前に想定された利用者予測数をもとに、準備期や終了期に4～7名、大会開催期に11～18名の理学療法士（うちコアメンバー2、3名）と、同部門にあん摩マッサージ

ジ指圧師・鍼灸師、整形外科医が配置された。

私の理学療法部門コアメンバーとしての役割は、利用者への理学療法提供のほか、理学療法部門スタッフの業務指導や役割分担管理、スケジュール管理、オペレーションマニュアル作成、情報共有、他職種連携といった運営マネジメントと、理学療法部門の利用者受付業務や治療担当者とのマッチング、難治症例への治療補助などの臨床マネジメントであった。日本全国のスポーツ理学療法領域で著名な先生方が参加したチームで、コアメンバーとしてマネジメントの指揮をとらせていただいたことは自信につながる経験であった。また晴海本村では、開村初日からのいわば『新クリニックの立ち上げ』の時期に参加する機会に恵まれ、他部門・他職種との連携やコミュニケーションといった人間力の大切さを改めて感じた。実際の理学療法提供の場においては、オリ大会で頸椎の急性外傷後に数日後の試合に出なければいけない選手や、パラ大会で足関節の慢性障害に悩んでいた選手の対応を数日間担当し、それらの選手から無事に試合に参加できたという嬉しい報告をいただけた。これまでスポーツ整形外科クリニックで臨床を積み重ねてきた経験が、選手のために発揮できたことの満足感とともに、今後も鍛錬していく必要性を感じた。

私がオリ・パラ大会の活動に参加して感じたレガシーはここに書ききることができないが、1つだけ挙げるとすれば、準備期間から大会期間、あるいはその後もつながりを持つことができた人と人との“ヒューマンネットワーク”の広がりと、今後の大事な財産だと感じる。今後の日本スポーツ理学療法の発展に今回の経験を活かせるよう尽力したい。最後に、東京オリ・パラ大会の活動に参加するにあたり、協力してくれた家族や職場の皆様をはじめ、関わりを持たせていただいたすべてのの方々に感謝申し上げる。



選手村診療所
オリンピック 晴海

横浜市スポーツ医科学センター
来住 野 麻美



私はオリ大会において晴海の選手村診療所にて活動した。参加日数は、準備期間も含めた 2021 年 7 月 12 日から 8 月 10 日に開設されていた期間のうち 15 日間であった。

選手村診療所は選手村滞在中の選手と選手団スタッフのみが利用できる。今大会では感染対策として診療所入口でのスクリーニング、日々の PCR 検査、手洗い消毒の励行などをして運営された。また、その対策の一環として予約制を導入したため診療所内が大きく混雑することはなく、利用者にとっても待ち時間軽減などメリットがあったように思った。

他科と同様に理学療法室は 7:00-23:00 で開室し、活動スタッフは前半シフトと後半シフトに分かれて 10 ～ 15 名が常駐した。私は主に前半シフトでの活動（7:00-16:00）で、毎朝コンディショニング用のアイスパスの準備や物理療法機器のセッティング、動作確認などを行った後、診療を行った。診療の内容としては、大会以前から痛めている部位の継続したケアやテーピング、コンディショニング目的が多かったように感じ

た。理学療法のあとに動作やトレーニングの指導を行う際は、同じ建物内上階にあるフィットネスセンターに同行することでもできた。選手の問題点や禁忌など状況を同センターに常駐するトレーナーとも共有することができたことで選手やスタッフの満足につながったのではないかと感じた。

一方で課題と感じる点もあった。利用者の多くは海外選手なので英語を中心としたコミュニケーションであった。禁忌説明などの重要な場面では英会話が堪能な理学療法士にサポートを受けたり、2 人 1 組での診療とすることで英語力を補完したりすることで、ほとんどの選手スタッフは我々の慣れない英語対応にも快く応じてくれたのであるが、国際的な活動には一人ひとりの英語力向上は必須であると感じた。また、宗教上の理由などで女性スタッフの対応を希望されることも多々あったのだが、今回選手村診療所で活動した理学療法士のうち女性は 2 割程度とのことだった。国内外のニーズに応えるにはスポーツに関わる女性理学療法士の育成や環境整備も急務であろう。

全国から集まった様々な知識、経験、技術を持つ理学療法士と診療できたことは大変刺激的であった。また、IOC の求める「世界的な基準を満たす医療を提供する」という目的達成のために診療所全体でチームとして活動したことは貴重な経験であった。それと同時にトップアスリートかつすぐに結果を求められる状況は緊張感のあるものであった。症状のある部位や種類、過去の外傷・障害歴を把握するなど丁寧な評価を行うことで結果につながる点は日々の診療と同様であり、それらをスタッフ間で共有するためには基礎基本が重要であることも再認した。この活動に参加できたことに感謝し、得られた経験を診療や選手サポートに生かすとともに、日本のスポーツ理学療法の発展に寄与していきたい。

選手村診療所
オリンピック 晴海

平成記念病院
唄 大 輔



私はオリ・パラ大会の選手村診療所（東京・晴海）でオリ大会が 10 日間、パラ大会が 17 日間の計 27 日間活動した。診療所ではケアが必要な世界のトップ選手に対しての理学療法を提供すること、そして、コアスタッフのサポートのため、レセプション業務も兼任した。理学療法を提供するにあたり、選手の訴えや要望に合わせて運動療法や物理療法を実施した。診療所内では人生をかけて金メダル獲得に臨む選手へ、最大限のサポートをすることを目的に理学療法スタッフ一丸となって治療にあたった。そのため、自身の臨床能力では補えない場面においては他のスタッフとともに治療にあたることもあった。また、今大会の特徴の一つとして、診療所がある施設の別フロアにあるトレーニングセンターにてアスレチックトレーナーの方々と一緒に動作チェックや動作指導も実施した。活動するなかで特に苦労したことは大きく 2 点あり、1 点目がパラアスリートの治療である。選手は欠損や機能不全、中枢性機能障害などを持っており、異常な筋緊張に対してテーピングをすべきか、アライメント不良や筋力低

下をどのように調整すべきか、感覚障害への物理療法など、他のスタッフと四苦八苦しながら最善の治療を提供した。2 点目がレセプション業務をするうえでの「言葉の壁」である。母国語が英語ではない選手がほとんどであり、理学療法室に備えてあるポケットークを使用しながら選手が何に困っており、何を希望するのか、問診し正しく理解することに苦労した。英語はもちろんのこと、その他の言語に対応できる理学療法士の必要性を感じた。今回の活動を通じ、多くのスポーツ理学療法に関わる理学療法士とのパイプができた。しかしながら、国際大会での理学療法サービスを提供するにあたって自分自身の能力がまだまだ低いことを痛感した。そのため、自己研鑽を続けるとともに、後進育成にも力を入れるべきだと感じた。



選手村診療所
オリンピック 分村：大磯

昭和大学

加賀谷 善教



オリ大会では、大磯プリンスホテルがセーリング競技の選手村分村となった。セーリング競技は7月25日(日)～8月4日(水)の11日間で、江の島ヨットハーバーを舞台に熱戦が繰り広げられた。Medical Station は分村の地下1階に設置され、選手の入村と帰国に合わせて7月13日(火)～8月7日(土)の6:00～12:00、17:00～23:00の2部制で開室した。私は午後のシフトのコアメンバーとして15日間参加し、主にマネージメントに関わった。

Medical Station には、Reception の後方に Doctor、Nurse 各々1名が常駐する Medical examination room が設置され、Physiotherapy と Sports massage therapy は Reception 前方の同じスペースにベッド5台を配置して運営した。Medical Station の運営としては、事務方が常駐する Reception も含めてコンパクトにまとまっていたため、コミュニケーションが取りやすく、様々な問題にも臨機応変に対応ができた。

午後のシフトは、基本的に Physiotherapist 3名と Massager (Acupuncture therapist) 2名が配属された。セーリングの競技特性や外傷・障害の特徴を考慮すると Physiotherapy よりも Massage が多くなることが予測されたため、Sports massage therapy 希望の選手に対しては手の空いている Physiotherapist も対応するようにした。そのため、分村では Physiotherapist と Massager (Acupuncture therapist) との隔たりがなく、和気あいあいと治療を進めることができた。

開村後は選手の動向を見極めながら、臨機応変にシフトを変更した。午前には多くの選手が江の島ヨットハーバーに練習に出ており、ほとんど利用がなかった。一方で、午後の利用者は開会式前までは本村よりも多い日が続いたため、午前シフトに配属されていた4名の Physiotherapist のうち1名を午後に変更してもらい対応した。また、初診の選手は、Sports massage therapy 希望であっても Medical examination room で Doctor の診察を受けることになっていたが、途中から Doctor が Physiotherapy room に来て診察するように変更した。

Physiotherapist たちは、Sports massage therapy 希望の選手に対しても Physiotherapy を組み合わせて行っており、選手とのコミュニケーションと信頼関係の構築等、良い経験ができたと確信している。

選手村診療所
オリンピック 分村：大磯

松田病院

佐藤 友梨花

私は、オリ大会のセーリング分村で、2021年7月13日の開村から21日間勤務した。

開村直後はまだ競技が始まっておらず、選手の診療所利用も少数だったが、競技が始まると利用者数も増加した。セーリング分村の理学療法室は、理学療法士3～4名とマッサージ師2名が配置され、7時～13時と、17時～23時までの二部構成で運営された。

選手が診療所を訪れると、受付の事務スタッフや私たち理学療法士で利用目的を確認し、医師の診察に案内、医師が必要と判断すれば理学療法が処方された。セーリングという競技特性上、上肢の外傷や腰痛などの症状が多かった。また、練習や競技による疲労のリハビリを目的としたアイシングマシンの利用を希望する選手も多い印象だった。

利用状況は、日中の練習や競技を終えた選手やコーチ達が、食事を済ませた後の夜間帯に集中していた。理学療法士の役割は、診療所に勤務する医師、看護師、薬剤師や事務スタッフと共働き、診療所を運営するこ

とだった。

様々な国の選手やコーチが利用する中で、時には英語によるコミュニケーションがうまくいかない場面もあった。それは、私の英語力の問題もあったし、選手自身が英語以外の言語を公用語とする国出身である場合などである。AI通訳機(ポキートフ)を使用したり、コミュニケーションをはかるために悪戦苦闘する場面もあったが、どの選手もとても寛容で、私の慣れない対応にも快く応じて下さった。

本村と比べて規模の小さい診療所であったが故に、他職種との連携を密にとることが出来、選手達との距離もとても近く感じた。そして、普段様々な環境や立場で勤務している全国の熱意ある理学療法士達と共働き、一つの診療所をつくり上げていくことはとても貴重な経験だった。今回の活動は私に多くの刺激を与え、今後の私の理学療法士としての活動を支えてくれる素晴らしい経験となった。



選手村診療所
オリンピック 分村：修善寺

日本女子体育大学
永野 康治



私は、オリ大会選手村診療所（修善寺）の理学療法士として、医務室理学療法部門を担当した。開設期間は、2021年7月13日（火）～8月10日（火）（競技は7月26日（月）～27日（火）に自転車マウンテンバイク、8月2日（月）～8日（日）に自転車トラック）であり、このうち11日間に私は参加した。修善寺の選手村は分村として、上記の自転車競技に参加する選手用に設置されたもので、医務室は分村内の建物の既存スペースを使用し、同フロア内に診察室、処置室、薬局、事務室とともに理学療法部門が配置された。同建物内の別フロアには選手用食堂、トレーニングルーム、貸し出し用マッサージルーム等が設置された。

理学療法部門は理学療法用のベッド2台、各種物理療法機器、テーピング・トレーニング用物品、およびスポーツマッサージ用のベッド2台が配置された。大会期間中は、2交代制で各シフト理学療法士3名とマッサージ師2名が配置された。理学療法士、マッサージ師の人数が少なかったため、理学療法士とマッサージ師が共同して理学療法部門の運営を行っ

た。具体的には理学療法の利用者に対して理学療法の実施後に他部位のスポーツマッサージによるコンディショニングを行ったり、スポーツマッサージの利用者が痛みを有する部位を有した場合に理学療法を勧め実施に至った。また、同フロア内に医師、看護師、薬剤師、組織委員会職員、ボランティアの他職種が共に活動していたため、様々な職種により医務室運営がなされていることを実感した。また、他職種に理学療法の内容や効果を理解してもらう必要性も感じられた。

活動の中で、各国選手団に帯同していたトレーナーとも交流する機会があったが、そのほとんどが理学療法士であった。そうしたスタッフも本理学療法サービスに満足していたように見受けられたことから、本邦の理学療法はスポーツ分野において十分なレベルにあると考えられた。

選手村診療所
オリンピック 分村：修善寺

八王子スポーツ整形外科
吉田 美里



私はオリ・パラ大会期間中、静岡県伊豆市に設置された選手村診療所（修善寺）を担当した。修善寺の選手村分村は、自転車競技に出場する選手やチーム関係者が滞在した。開設期間は、オリ大会期間 2021年7月13日～8月10日、パラ大会期間は8月17日～8月29日であり、このうち私は両期間あわせて11日間参加した。

メディカルスタッフの人員は、医師・看護師各1名（24時間体制）、薬剤師1名、理学療法士3名・鍼灸・マッサージ師2名で構成された。救急対応を除き7:00～23:00の開室であった。

私のオリ大会での参加日程は、選手村の開村日とともにスタートとなっていたため、受付から診療の流れ、電子カルテや予約システムの使用方法、物品や物療機器の活用方法や感染対策など、どれもはじめは手探り状態であった。そのためコアシタフの方を中心として、一連の流れに関してオペレーションの確認を行うことからスタートすることとなった。はじめての環境で、はじめての業務を、はじめてのメンバーでつくっていくという経験は、普段の医療機関での勤務とは異なり、苦労が多いながらもと

ても貴重な時間となった。また期間中は数日毎にスタッフが入れ替わるため、スムーズに情報共有が図れるように医務室内の掲示やマニュアル作成などにも取り組んだ。

実際の選手対応は、主にパラ大会期間中に数名担当した。これまでパラスポーツに関わる機会はなく、選手それぞれの障がいに対してどのように対応すべきか、緊張する思いもあった。ただ、実際に選手対応を通して感じたことは、健康者と変わらない対応が求められるのだということ、当たり前とも思われることを再認識する機会となった。身体障がいや知的障がいなど、選手により異なる背景をもっているが、それぞれの選手の特徴に応じた考慮をしたコミュニケーションを心がけ、治療内容を工夫するという点は通常の医療機関での勤務にも通じるものであると感じた。知識・経験ともに未熟な現状ではあるが、選手と向き合う上で大切な心構えを学ぶことのできる機会となった。

最後に、大会期間中は日替わりで多くのスタッフの方々と一緒に活動できた。国際大会やスポーツ現場の活動経験豊富な方や競技特異的な情報を熟知している方、徒手・運動療法やテーピングやインソールの処方にも長けている方、鍼灸・マッサージ師の方々、様々な経験をもつ方々と一緒に時間を過ごすことで、選手とのコミュニケーションのとり方や治療アプローチの方法など様々な視点からの情報を共有できた。限られた時間・環境で競技に向かう選手に対応する上では、自分自身の知識・経験を蓄えることと同時に、より適したアプローチを提供できるようチームとしてコミュニケーションを高めていくことの大切さを感じることができた。

このような貴重な機会をいただけたこと、組織委員会やコアシタフの方々に感謝したい。



選手村診療所
パラリンピック 分村：河口湖

慶應義塾大学病院
今井 寛志

パラリンピック自転車ロード競技は富士スピードウェイで 8 月 31 日から 9 月 3 日までの 4 日間に渡り開催された。競技会場からバスで約 45 分、山梨県の河口湖周辺に自転車ロード競技選手専用の宿泊施設が設営された。その中に医務室が設置され、理学療法サービスが提供された。

携わった医療従事者は、理学療法士 18 名、鍼灸・マッサージ師 12 名であった。理学療法エリアは、3 台の診療ベッド、物理療法複合機、圧迫機能付きアイシング機器などを備えた。複数の理学療法士は、修善寺の選手村（自転車トラック競技）から継続して参加しており、河口湖では成熟した理学療法サービスを提供することができた。看護師、事務の方も大磯、修善寺から活動を継続されている方が多く、医務室は、終始アットホームな雰囲気運営されていた。

パラリンピックで使用される自転車は、脳性麻痺用の三輪自転車、両下肢麻痺用の手漕ぎ自転車（ハンドサイクル）、視覚障害用のタンデム自転車、片足切断や片麻痺用の二輪自転車がある。理学療法サービスの 1

日の利用者は 0 から 5 名程度と少なく、最も多い需要は疲労回復目的のマッサージであった。マッサージはハンドサイクルの選手は背部と上肢、その他は下肢中心に全身を希望される選手が多かった。外傷や障害では、肉離れ、overuse、腰痛などが多く、物理療法、徒手療法、テーピングなどで対応した。

理学療法では、利用者が少なかったため、慌てることなく、周囲と連携を取りながら、感染に十分配慮し、安心安全で質の高いサービスを提供することができた。医師の診察に同席し、診療目的の共有を図った。また、マッサージ師から技能を習い、理学療法に活かすことができた。マッサージ師の行うマッサージは、疲労回復、可動域改善、リラクゼーションなど高い効果を発揮しており、チームサポートに携わる理学療法士にとって強力な武器になることを改めて実感した。外傷や障害に対しては、理学療法士同士が意見を交換しつつ、診療に当たった。多くの優秀な理学療法士は、解剖・運動学、病態学、物理療法学の広く深い知識を持ち、臨床推論に専門家ならではのアイデアや技術を加えて、選手を最高のパフォーマンスに導いた。

河口湖で活動した多くの理学療法士がパラサイクルに夢中となった。近い将来、パラリンピック自転車競技に関わったスタッフがこの領域で活躍し、学会や競技会で再会できることを期待しつつ、閉室・撤収作業を行なった。

選手村診療所
パラリンピック 分村：河口湖

八王子スポーツ整形外科
北山 愛萌



私は、オリ・パラ大会選手村総合診療所（河口湖）の理学療法部門スタッフとして従事した。開設期間は、2021 年 8 月 17 日（火）～9 月 4 日（土）（競技はサイクリング（ロード）、競技日程は 8 月 31 日（火）～9 月 3 日（金））であり、このうち 6 日間に私は参加した。

開設当初は選手が入村前のため、診療所内のレイアウトを車椅子が通過できる幅を確保したり、飛び出しているパーテーションの脚を白黒に塗り見えやすいようにしたりなど、利用者が安全に利用できるよう診療所の全スタッフで話し合いながら環境づくりを行った。開設期間中は、午前 7 時～午後 11 時を半日交代で 3 名の理学療法士と 1 名のあん摩マッサージ指圧師または鍼灸師で対応し、患者情報を正確に引き継ぐことで、互いに円滑に活動が開始できるよう、入れ替わる際にミーティングを行い、周知すべき情報は記録を残すことで情報を共有した。

理学療法対象となった患者について医師より診断と所見を伺い、患者本人からも症状を聴取し、ニーズに応えられるよう治療にあたった。開設当初は診療所の存在が周知されておらず利用者も少なかったが、診療所

入り口のレイアウトを工夫し、場所をアピールすることで、見学者や利用者が増えていった。利用者が理学療法を受けたことで効果を感じると、連日診療所を利用していただけたり、ロコミで利用者が増えてきたりと、選手や関係者が徐々に診療所を受容する変化がみられ、理学療法スタッフの意欲も高まっていった。

河口湖の診療所は病院とは違い、実際に診察の様子が確認でき、その場で医師との連携が取れるため、よりの確な治療が施しやすかった。直接連携をとることの少ない薬剤師・看護師の方々と意見交換もでき、一緒に携わった看護師の方は「今後もっと理学療法士さんと話そう」と理学療法士に対する印象が変化しようだった。あん摩マッサージ指圧師・鍼灸師の方々はスポーツ現場での経験や技術について意見交換もでき、我々がどういった治療を行なっているのか、病態をどう捉えて治療にあたっているのか、他職種の方々に知っていただく良い機会であった。医師と理学療法士、あん摩マッサージ指圧師と鍼灸師が 1 人の患者について最善の治療方針を討議する機会にも恵まれ、日本のチーム医療の素晴らしさを経験した。

今回の経験を経て、理学療法士が患者に対して「即時効果をだす」とことはとても重要であると改めて認識させられた。治療効果がそのまま信頼に繋がることを肌で感じ、これまでの経験を活かすことができた達成感を得ると同時に、診療所の数日で改善される症状が本番直前まで抱えざるを得ない状態であったことに、選手たちが医療面でのサポートを十分に受けることができていない現状も知った。今後は、理学療法士一人一人が活動の場を広げ、スポーツ現場における理学療法士の役割・存在意義を知ってもらう必要がある。



競技会場
オリンピック 陸上

帝京大学スポーツ医科学センター
廣重 陽介



オリ陸上競技においては、20名の理学療法士を含む総勢120名のメディカルスタッフが大会を支えた。理学療法士および Athlete care assistant は日本陸上競技連盟医事委員会トレーナー部員で構成された。そのため、普段から陸上競技の大会医務活動に関わっているメンバーで活動できたため、コロナ禍でリハーサルが制限されたものの、スムーズに活動に取り組めた部分が多くみられた。私はパラ陸上競技にも関わったが、リハーサルができなかった状況から、一定の活動スキルや共通意識を十分に持っていない状況での活動となり、パラ陸上ではマネジメントに大変苦労をした。

理学療法士の活動内容としては、オリンピックスタジアム（大会会場、そのウォームアップトラック、代々木、江戸川陸上競技場（練習会場）にて競技・練習中の事故発生や事故防止に向けた観察、応急処置、医務室への搬送、医務室での診療補助等であった。大会はモーニングセッション（9:00-12:30）とイブニングセッション（19:00-22:00）に行われ、

各セッション前にはブリーフィングとして、開催種目の概要および救護上の注意点、様々な事例をもとにした救護シミュレーションや医務室対応シミュレーションを行いスキルの向上に努めた。陸上競技では同一時間帯に複数の競技種目が同時進行されるため、Field of Play（競技場内）救護をスタジアム内4か所およびスタジアム全体が見渡せるスタンドに配置し、スタジアム全体の救護観察を実施した。Field of Play 救護では観察、駆け付け、搬送事例があり、長距離種目、混成種目での対応事例が多かった。医務室では労作性熱中症、ハムストリング肉離れ、アキレス腱障害への対応が多くみられ、アイスタオルで身体冷却を行う Heat deck も多く活用された。陸上競技ではマラソン、競歩種目が札幌で開催された。半日前にスタート時間が変更となる競技があったり、直前まで教護チーム（医師、看護師、消防隊員、警察官など）とコンセンサスが得られていなかったりなど臨機応変に対応する力が強く求められた。大会全体を通して、「普段からの活動経験や準備」の重要性を強く感じた大会であった。

競技会場
オリンピック 水泳

桐蔭横浜大学
加藤 知生

私は東京オリンピック水泳競技会場の理学療法サービスコーディネーター（PTSC）として、大会開催までスタッフの確保、スケジュールングを行った。大会期間中は、理学療法士として、選手用医療（ファーストエイドおよび理学療法サービス）を担当した。

水泳競技は競泳、アーティスティックスイミング、飛込が東京アクアティクスセンター（プール5面：メインプール、サブプール、ダイビングプール、仮設競泳用プール、仮設アーティスティックスイミング用プール）、水球が辰巳国際水泳場（プール3面：メインプール、サブプール、仮設プール）および東京体育館（プール2面：メインプール、サブプール）、武蔵野の森スポーツプラザ（プール1面）。マラソンスイミングがお台場海浜公園（海上1面）と、5種目5会場（プール11面・海上1面）に分散して開催され、それぞれの会場に理学療法士および Athlete Care Assistant（以下、「ACA」という）を配置した。

水泳会場の理学療法士および ACA は日本水泳連盟連携組織 日本水

泳トレーナー会議に所属する会員より55名が選出され、うち理学療法士は27名であった。事前により良いサービス提供のため各種研修会を実施した。2019年11月には日本水泳ドクター会議と共同し、国際水泳連盟の医事担当理事や東京2020組織委員会の担当者を招聘し、円滑な選手用医療構築のためシンポジウムを開催した。

大会期間中、水泳医療スタッフは1日2交代性で配置し、延べ人数は医師196名、歯科医32名、看護師49名、理学療法士146名、アスリートケアアシスタント106名の体制で対応した。対応症例は、テーピングや徒手療法などの理学療法サービスの施術事例は無く、擦過傷やアイシングのみであった。一方、理学療法士が救護活動において、ライフセーバーや医師と情報共有し、救護の一翼を担う可能性を認識した。加えて、今回のオリンピックでは労作性熱中症が危惧される競技への対策として、アイスバス、直腸体温計、電解質計測器の使用など会期前に現地研修が実施された。マラソンスイミングでは実際のアイスバスの運用こそなかったものの労作性熱中症の症例は発生しており、スポーツ現場で活動する理学療法士には、これらの知識とアイスバスの技術は必要と考えられた。



競技会場
オリンピック サッカー(横浜会場)

藤沢湘南台病院

澁谷 利秋



私は、オリ大会サッカー競技横浜会場（横浜国際競技場）の Venue Chief PTとして、医務室と競技会場を担当した。

活動期間は、オリ大会期間中の2021年7月23日(金)～8月8日(月)のうち競技開催日の9日間であった。横浜会場では男女合わせて12試合が行われ、私は3日間4試合を担当した。

大会期間中は、全43名（医師15名、看護師7名、医務室担当理学療法士3名、トレーナー18名）で、シフトを作成し仕事にあたった。

医務室は7名（選手対応・新型コロナ対応を合わせて、医師3名・看護師3名・理学療法士1名）、グラウンド上（担架隊）は8名（医師1名・トレーナー部会員3名の計4名2組）で各1試合を担当した。

元より、神奈川県サッカー協会（以下 FAKJ）では、医科学委員会・トレーナー担当部会（様々なカテゴリーで活動する他職種も含めたトレーナーが在籍）があり、神奈川県内で開催される日本代表戦や国際大会など、医務室や救護班などの活動を行っていた。

今回のオリ大会では、全参加者が日本サッカー協会および FAKJ で開催するスポーツ救命ライセンス講習会を受講し、組織委員会の研修と合わせて事前準備をした。

また、会場では試合前に国際サッカー連盟（FIFA）のドクターが、最終確認のための研修を全員に対して行った。

女子決勝戦では、予定されていた他会場から急遽前日に横浜会場への変更というハプニングもあったが、先述の通り日頃より現場での活動を行っている FAKJ のトレーナー部会員の組織力が功を奏し、早急に経験者の人員確保ができ競技が行えた。

神奈川県・サッカー競技という小さな枠組みの集団ではあるが、県内で開催される様々な大会のメディカルサポート業務・会議や研修会など年間を通じて活動していたことが、今回の大きな大会でも臆することなく理学療法士が活躍する場を与えられたと感じた。

医療機関や施設では得られない技術や経験であり、今後現場へ出向く理学療法士が増えることを願う。

競技会場
オリンピック ボート

伊奈病院

遠藤 浩士



私は、オリ大会ボート競技会場の主任理学療法士として、海の森水上競技場における医務室と競技会場を担当した。主な活動場所は、ゴールエリアであるポンツーン（海と陸を繋ぐ棧橋）であった。開設期間は、2021年7月18日(日)～31日(木)（競技は7月23日(金)～31日(土)）であり、私は6日間参加した。埼玉県理学療法士会として人財育成を図ったスタッフも含めて日々、理学療法士8名～10名体制により公式練習から決勝に至るまで支援活動を行った。実施した業務内容としては、医務室活動と FOP (field of player)（以下、「FOP」という。）活動でした。医務室活動では、各国の選手が、外傷、テーピング処置の他、腹痛、頭痛などの訴えに対して、医師、看護師と連携を図りながら補助的な活動を行った。今回の主な活動としては、FOP 活動が中心となり、ポンツーンで疲労困憊している選手に対して熱中症等の体調悪化に注視し、声掛けしながら必要に応じてアイスタオル、水などを手渡した。また、自力で立てない選手や意識朦朧として動けない選手を確認し、選手の安全を第

一に配慮し、担架や車椅子などによる搬送を行った。大会期間中は、ライフセーバーや救急隊との各想定事例ごとにおけるレスキューシュミレーションを繰り返し行うことにより、他職種からの速やかな情報提供、情報共有することで我々理学療法士にとっても事前準備すべき課題が明確になり、日々のシュミレーションの重要性を強く感じた。

今回の屋外における FOP 活動では、気温や湿度など天候状況によって選手のパフォーマンスや体調変化にもかなり影響があったため、こまめにレース後の選手への注視が必要であった。今回の活動を通じて、日頃の臨床とは大きく異なる経験をさせていただき、スポーツ現場における理学療法士が搬送技術を含めた救護に関わる知識や技術、また、チームの中での他職種との積極的なコミュニケーション能力などをもっと発揮していく必要があると感じた。



競技会場
オリンピック ホッケー

小山 智士



私は、オリ大会ホッケー競技会場の主任理学療法士として、選手医務室、フィールド担架隊を担当した。開設期間は、2021年7月19日（月）～8月6日（金）（競技は7月24日（土）～8月8日（日））であり、このうち14日間に私は参加した。

新型コロナウイルスの影響で参加困難となった理学療法士の先生もおられた。

会場での役割は、まず①入れ替わりで対応する複数の理学療法士、会場医務室医師、フィールド医師と情報共有を行うこと、②医務室を訪れた選手への対応、③試合中のフィールドでの担架隊、④審判の外傷・障害への対応とコンディショニングが主であった。

①では、その日に生じた外傷・障害や対応方法、熱中症のリスク管理と対応方法を共有し流れを確認した。医務室とフィールドの両方に医師の先生がおられたことは大変心強く感じた。熱中症は選手だけでなくスタッフやメディア関係者も対象となるため、リスクの高い場所や時間帯などを事前に

把握しておいたことで慌てずに対応できた。②では、試合や練習の際に負傷した選手が医務室を訪れた際に対応できるようにテーピングやストレッチング等の準備を行った。③では、フィールド医師が指示役となり外傷や熱中症が発生したことを想定した救急搬送のオペレーションを毎日行った。ホッケーは、キーパー以外は防具を装着しておらず、非常に硬いボールをカーボン製スティックでヒットするため、もし選手にボールやスティックがヒットすれば外傷・障害に繋がるリスクは非常に高い。当たりどころが悪ければ骨折や頭部外傷といった危険な外傷・障害も起こり得る。また靱帯損傷、脳震盪、脊髄損傷、心肺停止状態など様々なケースを想定した準備も行った。感染防止のため防護服（ガウン・キャップ・ゴーグル・マスク・手袋など）を着用して炎天下でスタンバイしなければならぬ大変な仕事であった。④では、試合で選手と同様に長距離を走る審判に対して、医師の指示の元で理学療法を提供した。多かった対応内容は、筋疲労（筋痙攣）、筋損傷（肉離れ）、捻挫（足関節靱帯損傷）であった。これらに対しては事前研修などの知識が役立ったと思う。この際にも感染防止に配慮し、マスク・ゴーグル・手袋などを着用して対応した。審判とのコミュニケーションは英語で行った。世界規模の大会では、英語でのコミュニケーション能力が大切であることを実感した。

活動を通じて感じたことは、これからの理学療法の在り方はどうなるのかということである。直接触れることができない状況では、触診して情報を得ること、接近して動作観察を行うことが困難となる。セラピストには必要に応じて柔軟に対応する姿勢が求められているように感じた大会であった。

このような貴重な機会を与えて頂いた関係各位に感謝の意を表し、この経験が後世に活用されることを願いながら、文章を締め括りたいと思う。

競技会場
オリンピック バレーボール

船橋整形外科病院

佐藤 謙次



私は、オリンピック・インドアバレーボール会場のVCPT（Venue Chief Physio Therapist）として、競技会場医務室、競技会場、練習会場医務室を統括させて頂いた。理学療法サービスメンバーは28名（理学療法士24名、他資格4名）で、日本代表経験者からスポーツ現場活動経験のない方まで様々であった。また互いに面識のない方も多く、技術のベースアップと標準化が当初の課題であった。

事前準備として、2年前から国際大会（Nations league、World Cup）の視察と任意研修会（計9回）を開催した。研修会の内容は救急処置（アイシング、固定、搬送等）、シミュレーション、マッサージ、英語対応とした。前半5回は対面での実技研修であったが、後半4回は感染症拡大のためオンラインとした。限られた条件下であったが、共通認識を持つことが出来たことに加えてチームビルディングにも有用であった。

パンデミック下における大会運営であったため、直前まで組織委員会からの情報が不足する状況が続いていた。そのような中で、感染症対応を含

めたサポート体制を構築するため、組織委員会・医師との連携を密にとり、3者会議を10数回開催した。またスタッフ間の情報共有のための説明会を20回程度開催した。さらに日替わりのスタッフの活動方法を標準化するため、「理学療法サービスマニュアル」を策定した。

活動期間は7月19日（月）～8月8日（日）であった。期間中は早番・遅番の2シフト体制とした。1シフトあたり7名（競技会場医務室2名、競技会場1名、練習会場医務室1名×4会場）で対応した。練習会場は試合会場から10km程度離れた既存体育館であり、理学療法士1名のみの配置であった。そのため有事の際には直ぐに会場医師と連絡を取れる体制をとっていた。

勤務管理、日報記録、連絡・報告においては、日々状況が変化する中でビジネスチャット（LINEWORKS）を活用した。こちらにはチャット機能の他に共有フォルダがあるため、マニュアル類、勤務シフト、日報、写真・動画などの共有することができ有用であった。またセキュリティ面においても比較的安全であった。最終的には我々だけでなく医師・歯科医師・看護師・組織委員会担当者にもご登録頂き、全職種共通の情報共有プラットフォームとした。

医務室は正式に診療所登録されており一般病院に準ずる運営となっていたため、我々としては慣れた環境であり多職種連携を取りやすいように感じた。また普段から感染症対応を経験している者も多く、実際に濃厚接触者の選手対応の際には大変心強かった。

今後のスポーツ現場での活動は、感染症に留意した対応が必須になると思われる。そのため今回の経験はこれからの現場活動において大きなレガシーとなると思われる。



競技会場 オリンピック 体操

船橋整形外科病院
岡田 亨

体操競技種目の体操、新体操、トランポリンの理学療法サービスコーディネーターとして有明体操競技場、ビックサイト練習会場で 2021 年 7 月 19 日から 8 月 8 日の間、活動した。

競技者担当医務は新型コロナウイルス感染症パンデミックの対策として、各担当エリア内の救護活動のみとし、バブル内の選手・審判員を限定的に対象とした。無観客開催下、その他の関係者は観客対応救護部門が担当し、厳格に対象を分けた。両部門長医師と理学療法サービスコーディネーター、組織委員会担当者は密に連携を図り、期間中の情報共有と現場対応の意思決定を行った。

競技者担当医務は、医師、看護師、理学療法士、アスレティックトレーナー、ボランティア、組織委員会担当で構成。理学療法士・アスレティックトレーナーは、各配置に合計 6～12 名程度を毎日に配置した。実人数は 33 名であったが、開催延期と感染拡大による辞退が相次ぎ最終的にこの人数となった。

組織委員会の研修等は社会的な混乱の中、未受講者も少なくなく、会場別研修も全員参加での実施は叶わなかった。

活動の体制作りは、各人の活動当日の現場入りの際のオリエンテーションと実技トレーニングで実施するしかなかった。当日に初見の現場、人によっては初めての競技、さらにその大会がオリンピックで且つ厳格な感染予防が必要とされる緊張感や雰囲気がかえって集中力を高め結果的に有効だったが、これ程打ち合わせや実技トレーニングを期間中に繰り返した経験はなかった。感染予防策として活動内容と対象を限定したため、現場でのトレーニングの反復が行え、スタッフ間連携をより強固にした。大会の救護件数は 0 件だった。

参加した理学療法士はこの経験を、臨床で我々の帰りを待っていてくれた患者・対象者と仲間へのお土産にすべきと考えている。

臨床の日常にはマニュアル・プロトコルが普及し、ある予定された流れ、つまり「ああすれば、こうなる」環境がある。忙しいが通常、マニュアルと言う拠り所がある。しかし今回の現場は、予定は未定で決定ではなく、拠り所も無かった。つまり「ああしても、こうならない」環境だった。しかし、臨床も本来そうであろう。今回のオリンピックで我々が授かったことは、目の前の事象に向き合い、自分で考えて判断して行動すること、要は「現場に立つ覚悟」を持つと言う基本の再認の場であったと感じている。現場における判断や選択の重みを自分で考え、引き受けて行動する覚悟、言わば現場力。オリンピックに関わった方は日々の臨床への覚悟と緊張感を奮い立たせ、そして関わらなかった仲間一人でも多くその経験と感覚を伝え、臨床の「現場力」「理学療法士力」につなげて頂ければと考えている。

競技会場 オリンピック バスケットボール

とつか西口整形外科
清水 結

私は東京オリ大会男女 5 人制 3 人制バスケットボール会場において理学療法サービスコーディネーターとして活動したので以下に報告する。

活動場所は 5 人制の競技会場がさいたまスーパーアリーナ、練習会場が東京ビックサイト、また 3 人制は競技会場が青海アーバンスポーツパーク（特設会場）、練習会場が中央区立総合スポーツセンターであった。活動期間は 2021 年 7 月 19 日～ 8 月 8 日で、私は期間中 10 日間ほど参加した。活動は主に医師・看護師などメディカルスタッフと連携して各会場における医療サービスを提供することであった。各会場には医務室を設置し、競技エリア・ウォームアップエリア・医務室に分かれて待機し必要に応じて交代しながら活動した。準備期間は主にトレーナー（理学療法士・鍼灸師・マッサージ師など）のシフト管理を行い、期間中も欠席者の対応などを行った。また会場ごとに搬送経路や連絡系統の確認など緊急時の対応計画をドクターとともに作成した。コート内での出血に対する応急処置など、トレーナーが実際に行なっているスポーツ現場での対

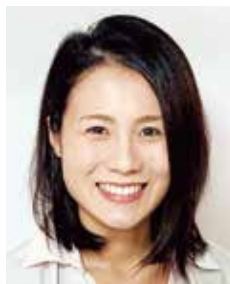
応に関してドクターと共有した。会期中感染症対策として全ての会場で従事するスタッフは毎回 PCR 検査を受けた。また必要に応じて個人用防護具 (personal protective equipment:PPE) を装着して選手対応を行った。3 人制競技は東京大会から新たに採用された。参考となるオペレーションマニュアルがない中で準備を進める必要があり、様々な場面を想定しながら人員や物品の配置、緊急時の対応計画などを構築していった。5 人制と異なり屋外コートを使用するため暑熱対策も必要であった。

全体を通じて、トレーナー対応は少なく軽傷なものがほとんどであったが、毎回のシフト開始時に緊急搬送訓練を入念に行い、十分な準備を行ったことで安心して活動に参加できた。また他職種の方々と一体となって大会を成功させることができた経験が自信にもなったため、今後の活動にも生かしていきたい。



競技会場
オリンピック ハンドボール

二神 沙知子



私はオリ・パラ大会ハンドボール競技会場の主任理学療法士として、国立代々木競技場内の医務室、競技エリア、ウォーミングアップ会場で活動した。競技期間及び医務室の開設期間は、いずれも 2021 年 7 月 24 日（土）から 8 月 8 日（日）であった。

事前準備では、理学療法士の活動マニュアルを作成した。会場での事前研修が COVID-19 感染症拡大の影響で中止となり、活動エリア内の動線や使用する資器材もわからない状態であったが、組織委員会の担当者や選手用医療責任者の医師との打ち合わせに加え、他の理学療法士から意見をもらい、業務・行動内容をできるだけ明確にした。大会期間中は、日替わりで活動する 10 名の理学療法士が日々の事案と症例を共有するために、理学療法士専用の記録用紙を作成した。また、事務的な連絡等は SNS を用いることで日々更新される情報をできるだけ早く相互に共有し、円滑な活動ができるようにした。

実際の活動では、医務室での理学療法サービス、競技エリアとウォー

ミングアップ会場での緊急時対応など求められる役割は多かった。特にウォーミングアップ会場では、限られた人数だったため、理学療法士に任されることが多かった。緊急時は、初期対応はもちろん、医師への迅速な連絡と対応時の協力、状況によっては会場ボランティアとの連携が求められる。そのため、日頃から医療現場で医師や看護師、様々な職種とのコミュニケーションを行う習慣があり、協力的で柔軟な対応ができる理学療法士の能力は、オリ・パラ大会では大きな力を発揮することができたと思う。

また、ハンドボール競技に参加した選手は男女同数であり、審判や大会関係者にも女性が多かった。実際の活動では、肩関節や股関節などに症状を有している女性の対象者がいて、対応する部位や文化の違いによる問題から女性の理学療法士を希望する事例があったが、活動している女性の理学療法士の人数が少なく、要望に添えないこともあった。このような国際大会において、スポーツに関わる女性理学療法士の必要性、需要の高さを改めて実感した。今後のスポーツ現場において、私自身も女性の理学療法士としてより質の高い知識・技術が提供できるよう、努力していきたいと感じた。

競技会場
オリンピック フェンシング

長汐病院

鈴木 享之



私は、オリ大会フェンシング競技会場の会場主任理学療法士として、理学療法サービススタッフの育成及び理学療法サービス部門の統括に携わる機会を得たので活動報告をする。オリ大会フェンシング競技は幕張メッセ（千葉県）で実施され、参加選手 42 カ国 261 人、公式練習開始は 7 月 19 日、競技期間は 7 月 24 日（土）～ 8 月 1 日（日）の合計 14 日間の活動期間であった。理学療法サービススタッフは東京都理学療法士協会より私を含め 18 名が派遣され、1 日当たり 4～5 名を配置した。新型コロナ感染対策等の会場医療計画について大会運営局による「競技会場における理学療法サービスマネジメントスタッフ会議」での情報をもとに準備をし、2021 年 6 月には全スタッフが 2 回目のワクチン接種を完了した。

活動エリアは、練習会場と Field of player:FOP 会場と医務室であった。医療提供に関わるメディカルスタッフは日々入れ替わりがあり、毎朝のブリーフィング後、救急隊と搬送シミュレーションをし救急搬送に備えた。

また、選手及び役員に対するコンディショニング提供（テーピング、マッサージ、トレーニング指導）や、試合中のインジュリータイムでの急性期対応（アイシング、固定、止血手当て等）は医師・看護師等と常に連携を取り対応した。

これらの活動を 18 名の仲間と分かち合えたのは、都士会が企画した 6 年半に及ぶ人材育成の成果である。ユニバシアード大会やリオ五輪の視察から得られた情報をもとに人材育成（テーピング、物理療法、急性期対応、シナリオトレーニング等）計画を立て、国際大会救護活動を通して現場経験の機会も確保した。スポーツ現場に必要な技能確認は、アスレチックトレーナーや救急救命士等他職種の方々の協力を得て外部評価により実施した。そこにスポーツ理学療法ビギナーである多くの会員がチャレンジャーとして参加し、最終的な意向確認と選抜テストを行い 18 名のスタッフを選抜した。選抜後も更なるスキルアップとしてワールドカップ大会やオリ大会テストイベント等にて OJT (On-the-Job Training) を用いつつ経験を重ね、舞台振付師による姿勢や振る舞いの指導を受けた。大会期間のシフトは NTC (National Training Center) を本番会場と見立て AMSV によるチェック（救急搬送・BLS・無線通信・語学）を受けスキルを点数化し配置決めを行った。仲間と共に切磋琢磨した研鑽の日々が、他職種のメディカルスタッフと職域を超えチームを構成するに至った。今回の体験は、それぞれが各職場に戻り日常業務や地域活動そしてスポーツ競技のサポート活動等を行うにあたりとても貴重な時間と経験になった。

これら今までの活動と成果を基盤とし、一緒に戦った仲間達と共に、新たな「運動／スポーツを楽しむ健康日本」のレガシーを築いて行きたい。



競技会場
オリンピック 柔道

愛媛医療センター

川道 幸司



私は、オリ大会前は柔道競技の理学療法サービスコーディネーター、オリ大会中は会場チーフ理学療法士として参加した。柔道競技は 2021 年 7 月 24 日（土）～31 日（土）まで日本武道館で開催された。私の活動期間は練習会場を含む 7 月 19 日（月）～7 月 31 日（土）までの 13 日間であった。

オリ大会前は、1）スタッフの人选、2）スタッフの活動シフト作成、3）オリ大会に向けた研修・講習会の企画、4）統括医師や組織委員会との打ち合わせ、5）他競技の理学療法サービスコーディネーターとの情報交換などを行なった。オリ大会中は、練習会場と競技会場における活動やスタッフ間の情報共有などを統括した。

柔道競技における理学療法士の役割は、1）医師が行う医務活動の補助、2）重大事故発生時の搬送、これに加えて3）感染対策である。柔道では、硬膜外血腫など重大な頭・頸部外傷の発生リスクが高く死亡例も出ていることから、特に搬送練習には注力した。医師と理学療法士・

看護師・柔道整復師などが連携して搬送手順や、会場の導線を確認しながら繰り返し練習を行なった。また医療機関へ救急搬送することを想定して救急隊員との連携も確認した。実際に会期中は、医療機関への救急搬送が数例あった。搬送事例は日々のブリーフィングで振り返り、課題をスタッフ間で共有した。感染対策は、練習会場や競技会場における換気・消毒、个人防护具の着用、活動時間外の行動制限などを行ない、PCR 検査は毎日実施された。

オリ大会の 1 年延期で不安と焦りは強かったが、過去に実施した国際大会の研修や救護講習会の経験が生かされていたと感じた。柔道競技の医務活動は医師と協働することが必要である。よって医学的知識や競技に関する知識、また医師と共通言語でコミュニケーションがとれる能力を持った理学療法士は貴重な人材であり、医務活動チームの一員として大いに貢献できる可能性がある。

競技会場
オリンピック バドミントン

札幌医科大学附属病院

河合 誠



私は、オリ大会バドミントン会場のベニューチーフ理学療法士として、医務室、競技会場を担当した。開設期間は、2021 年 7 月 19 日（月）～8 月 2 日（月）（競技は 7 月 24 日（土）～8 月 2 日（月））であり、このうち 12 日間に私は参加した。

大会直前まで会場環境やスタッフ配置、活動内容などが不透明であったため、事前準備は理学療法士のシフト調整が主であった。大会期間中は、6 名の理学療法士が現場活動に円滑に入れるようメールにて情報提供、情報共有を統括した。

現場経験が豊富なスタッフが半数以上いた一方、バドミントンの国際大会における医療スタッフ経験者がいなかったため、日本バドミントン協会所属で大会サポート経験豊富なアスリートケアアシスタント（以下、「ACA」という。）スタッフと連携して活動した。

本競技会場において医療スタッフが提供するサービスは、外傷や急性疾患に対する応急処置に限定されたため、我々は ACA と協力して、ウォー

ミングアップ会場とメイン会場を巡回し、問題等が発生した場合は無線で医師に連絡し、医務室への搬送や医療行為のサポートを行った。

大会期間中に出場選手に発生した外傷部位は、足関節、アキレス腱であった。いずれも医師が診察の上、応急処置を行い、選手村に搬送された。我々が理学療法を施す機会は少なかったが、本邦のバドミントンに関わる医師や看護師、トレーナーとコミュニケーションを深め、関係性を築けたことは有益であったと考える。バドミントンは連日試合があるため、選手のリカバリーやリコンディショニングに対する要求は非常に高い。理学療法士は、外傷に対する応急処置、痛みやパフォーマンス低下の要因となる機能障害に対する即効性の高い治療手技を身につけることで、競技会場において必要性の高い医療スタッフとしての立場を確立できると考えた。



競技会場
オリンピック カヌー

健康科学大学

粕山 達也



私は、オリ大会のカヌースラローム及びカヌースプリント会場の主任理学療法士として、医務室、競技会場を担当した。開設期間は、カヌースラローム競技が2021年7月20日(火)～7月30日(金)(競技は7月25日(日)～7月30日(金))、カヌースプリント競技が7月28日～8月7日(競技は8月2日(月)～8月7日(土))であり、このうち9日間に私は参加した。

事前準備として、2019年にプレ大会がオリ大会と同じ施設で実施されたため、応急処置の対応方法や理学療法サービスの流れについてマニュアルを作成し、共通理解を深めた。また、大会1ヶ月前には会場研修にて、会場の全体像の把握や救急搬送の経路、感染対策について、スタッフ間での共有を図った。

大会期間中は、Zoomを用いたWeb会議により情報共有を図り、SNSを活用した情報共有を統括した。水上競技の特性上、水難事故に関する救急対応が最重要事項であり、大会期間中は早朝の時間帯を使用し消防庁やライフセービング協会など関係部署と連携して、ミーティング

及び救急搬送練習を実施した。スプリント会場においては、熱中症対策のアイスバスの運用が必要であり、設置準備や搬送方法の確認も実施した。医師、看護師とも積極的なコミュニケーションを図り、急病者に対する役割分担を明確にして、心肺停止や重度の熱中症など様々な救急搬送のシミュレーションを実施し、診察から救急搬送、理学療法サービス提供までの流れを確認した。

医務室での活動については、テーピングでのコンディショニングや筋損傷に対する応急処置が求められ、レース間での対応が必要な選手も存在し、4年に1度の重要な大会で世界レベルの選手へ対応できる知識と技能が必要であった。大会を通じて、理学療法士にも水難事故に対する迅速な救命措置の必要性を痛感し、実践的に動ける能力を高めていくことが重要であると考えている。

競技会場
オリンピック アーチェリー

中部大学

宮下 浩二



私は会場の主任理学療法士として、オリンピックアーチェリー会場における医務室と練習会場、競技会場での活動は行った。また、会場担当以外では、競技終了までSNS等を活用して情報提供、情報共有を統括した。初日に会場設営、組織委員会スタッフ、医師、看護師、ボランティアスタッフと種々の打ち合わせを行った。その後は、日替わりで対応する7名の理学療法士が現場活動に円滑に入れるようSNSにより情報共有を毎日数回行った。

理学療法士が機能評価や理学療法を実施する機会はなかったが、熱中症などの対応を行う医師、看護師をサポートして共働した。日常的に医療機関で勤務する理学療法士はチーム医療として医師や看護師とのコミュニケーションを行っていることが活動の効率を高めたと実感する。

理学療法士が機能評価やそれに基づく理学療法を行うリコンディショニングは一度も実施する機会はなかった。しかし、それがオリンピックの会場の特徴であると考え。競技の現場(会場)には選手村などでコンディ

ションを十分に整えた選手が来場するため、オリンピックのような医師や看護師、救急救命士が参加する競技大会において理学療法士は後方支援をすることになる。しかし、日常的に医療機関で活動しているため、その場で他職種と相互に協力して目的を達成するチーム医療では多様な働きを発揮できる強みも感じた。医師が統括し、点滴など経皮的処置は看護師が行い、命に関わる外傷・症状は救急救命士が対応する、というのがオリンピックでの現実である。

このような場面において、理学療法士の役割として「運動器の救急処置」は重要になると考える。今回は対応する機会はなかったが、肉ばなれや捻挫などの運動器の急性外傷に対しては理学療法士がその技能を発揮することができるのではないだろうか。同時に、他のスタッフがいなかった場合には、熱中症や脳震盪などへの対応についても理学療法士(大会等のトレーナー資格登録者)が任されることになるため、今後のスキルアップが望まれる。

本大会では図らずも、現在の理学療法士の役割のフレームが明確になったが、このこともレガシーの一部と実感した。



競技会場
オリンピック ゴルフ

静岡東都医療専門学校

下田 健一郎



今回、オリ・パラ大会ゴルフ会場の Venue Chief PT（理学療法サービスのマネジメント）として、医務室、競技会場での医療提供サービスを担当した。

開設期間は 2021 年 7 月 23 日（金）～ 8 月 8 日（日）。競技は男子 7 月 29 日（木）～ 8 月 1 日（日）、女子 8 月 4 日（水）～ 8 月 7 日（土）で実施され、このうち男子ゴルフ競技予備日も含めた 5 日間、参加した。

事前研修等はコロナウイルス感染症の影響により、そのほとんどが e-learning に置き換わり、メディカルスタッフ全員は 10 時間近くの e-learning を受講した。また、開幕直前ではあったが、競技会場である霞ヶ関カンツリー倶楽部にて会場別研修も行われ設置された医務室や競技会場の待機場所の確認を行った。その研修では、実際に競技会場を歩き、搬送ルートや待機場所と医務室とのルート確認とその連携、熱中症とコロナウイルス感染症の鑑別時に使用される隔離室の設置場所など活動時をイメージしながら研修を行い、サポート活動に備えた。

大会期間中では、ゴルフ競技は早朝より練習が始まり、競技後も遅くまで練習するケースが多いため早番、遅番のシフト制をとり、理学療法士とアスリートケアアシスタント（柔道整復師・はり師・きゅう師等）が現場活動で円滑に活動が行えるように SNS を活用して情報提供、共有を行った。

競技会場における医務室は、診療所扱いとなるため医師の指示の下、理学療法サービスを提供することであった。国際オリンピック委員会の定義する理学療法サービスでは、リハビリテーション、リカバリー、障害予防等により徒手・物理的介入によりアスリートのパフォーマンスを支える全分野について、そのサービスを提供することが想定されていた。

実際の医務室における理学療法士の役割として、救急対応（搬送も含む）や熱中症対応時に医師、看護師と共働して活動することであり、その準備を念入りに行った。競技期間中は雷雨接近による競技の一時中断などあったが、サポート活動では十分準備したことが幸いしたのか、男子ゴルフ競技期間中は外傷等もなく終えることができた。また、競技会場に配置されている待機所から医務室までのルートの確認・当日の変更などに対しても医師・看護師・理学療法士・アスリートケアアシスタントで連携を密に取りながら活動を行った。このような連携は、病院等の医療現場においても同様のチーム連携であるため活動の効率を高めたと実感した。

今回のオリ・パラ大会では、厳重なコロナウイルス対策の緊張感と国際基準での医療サポート体制（設備や人材）を肌で感じることができ、非常に貴重な経験となった。今後、国際基準に見合った救命救急・外傷等における対応（処置・搬送など）や語学力が課題であると強く痛感した。

競技会場
オリンピック 野球・ソフトボール

ウエルケアわきた整形外科

千葉 慎一

私は 2018 年 12 月からオリンピック開催直前まで野球とソフトボールの理学療法サービスコーディネーターとして活動した。この仕事は競技会場で提供する理学療法サービス内容の検討および人員配置・確保をする際のアドバイザー、組織委員会に対する相談窓口としての役割である。野球とソフトボールは競技期間が長く、また競技会場以外に練習会場にも理学療法士を配置する必要があったため、他競技と比較してより多数のボランティアを確保する必要があった。また、海外の選手や医療スタッフと「専門的な業務に必要なコミュニケーションが可能なレベル」の英語力をもった者はほとんどおらず、人員を推薦するうえでかなり頭を悩まされた。

提供する理学療法サービス内容に関してもかなり悩まされた。野球やソフトボールはチームスポーツであるため、各国それぞれ独自の医療スタッフが帯同してくることが予想された。また、提供した理学療法サービスにより勝敗が左右されてはいけないという縛りがあった。そのため、ボラン

ティアスタッフが競技会場でストレッチやマッサージ、テーピングなどを行うことは無いのではないか、出来ないのではないかと懸念された。結局、競技会場では「医師が指示したリハビリテーションおよび救急対応のみを行う」という方針を決定し医師およびボランティアに共有してもらった。

オリンピック開催期間中は横浜スタジアムで、Venue Chief Physiotherapist として活動した。幸いなことに今大会では選手にリハビリテーションを提供する機会はなかった。そのような状況下で私達が行った業務は練習中や競技中に発生するアクシデントに備えた対応であった。具体的には練習、試合の監視、グラウンドで事故が発生した場合の救急搬送の準備である。中でも救急搬送の準備が一番苦労した。救急搬送の方法は事前研修を受け練習も行っていたが、実際に競技中に事故が発生した時には医師も含めた医療スタッフ全員が適切な対応をすることが出来なかった。以来、毎日、競技開始前に 2 回、本番を想定した緊張感のある救急搬送練習を医療スタッフ全員で実施するようにした。会場では多数のボランティアスタッフが日替わりで活動していたため、私は先述したような日々の業務のコーディネートを行った。我々理学療法士が救急搬送を行う機会はほとんど無く、知識、技術も無い。しかし、搬送を含めた救急対応の知識、技術はスポーツ現場で理学療法士が活動するうえで、習得しておかなければならない技術であると、今大会を通して痛感した。



競技会場
オリンピック 野球・ソフトボール

福島県立医科大学附属病院

嶋原 智彦

福島あづま球場ではソフトボール 6 試合、野球 1 試合が 3 日間にわたり開催され、理学療法士 21 名（延べ 61 名、福島県内 20 名、男性 12 名、女性 9 名）、ACA2 名（延べ 6 名）が選手用医療班として対応した。当初は国内の理学療法士があづま球場に参集して対応を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により移動制限のため、福島県内から追加募集を行った。一社）福島県理学療法士会が実施するスポーツサポート活動に参加しているスタッフを中心に、女性アスリートに対応するべく女性理学療法士が多く参加できるように工夫した。野球・ソフトボール競技に関わったことがないスタッフもあり、高校野球大会メディカルサポートへの参加、外傷処置や救急対応についての勉強会を開催するなどできる限りの準備を行った。

会場医療責任者や選手医療用担当医師は福島県内から選出されたため、県内のスポーツサポートを普段から協働しており、事前協議や連携はスムーズに行うことができた。

練習日・競技日では、スタッフ集合次第ミーティングを行い、スタッフ配置、救急事案発生時のそれぞれの役割、搬送経路・搬出方法・情報伝達経路の確認を行った。また、実際の会場を使用した搬送方法のシミュレーションを実施し、傷病者接触から選手用医療室への搬入を 3 分以内にできるよう練習を繰り返した。スクープや頸椎カラー、ストレッチャーなど、普段の臨床ではあまり使用しない機材もあり、事前に使用方法を確認する必要があった。あづま球場では試合会場と練習会場が離れており、選手はバス移動、スタッフは徒歩で 10 分以上かけて移動する必要があった。練習会場で救急事案が発生した場合の対応について医師がすぐにアクセスできない環境にあり、より経験があるスタッフを配置するなどの対応を行った。

福島県の理学療法士で国際大会を経験があるスタッフは少なく、本大会の経験を広めることで、後進育成を進めていきたい。

競技会場
オリンピック スポーツクライミング

タムス浦安病院

樋口 拓哉

東京オリンピックでのスポーツクライミングは、リード、ボルダリング、スピードの 3 種目を 1 名の選手が全てを行う複合種目で行われた。スポーツクライミングは今大会初のオリ大会であり、前例がない分、他競技での情報収集や国内大会で活動練習を行なった。

私は 2018 年より理学療法サービスコーディネーターとしてスポーツクライミング競技の理学療法士の活動や人数配置について調整を行なった。理学療法サービスコーディネーターでは、他のオリンピック・パラリンピック種目の理学療法士と情報共有、当日活動する理学療法士のシフト作成や活動場所の人数配置の調整を主に行なった。オリ大会までの準備期間では、理学療法士 6 名と SNS 等で連携を取り、情報交換や最新情報を提供し、円滑にオリ大会が行える様にコミュニケーションを多く取った。

私の競技会場での役割は主任理学療法士であり、医師や看護師との活動連携を行い、シフトに合わせた理学療法士の活動の情報共有を行なった。練習会場では、スピード壁とボルダリング壁があり、熱中症対策とし

てテント、ドリンクが常備されており、救急対応の準備として医師、看護師、理学療法士が 1 名ずつ配置した。医務室では、救急処置の医療器具や薬品、テーピングなどが常備されており、医師、看護師、理学療法士が 1 名ずつ配置した。競技会場では、会場前に医師、看護師が 1 名ずつ配置し、会場より少し離れた所に医師が 1 名、理学療法士が 2 名配置され、搬送の準備や競技中の救急対応に対する準備を行なった。今回は選手への直接的なマッサージやコンディショニングのような関わりがなく、応急処置や救急対応で選手へ関わりを中心にメディカル対応を行なった。今回の対応をもとにスポーツクライミング大会でも選手へのケアやコンディショニングが行えるような対応をとっていきたい。

私自身は、スポーツクライミング競技のチームトレーナーとして活動に加えて、競技団体での医科学委員会として、救護活動を必要に応じて参加している。今回の体験を得て、理学療法士の役割を明確にし、スポーツクライミング競技の発展に繋げられるように活動を継続していく。



競技会場
オリンピック 空手

伊藤整形外科

水田 洋平



私は空手会場の主任理学療法士として選手用医療を担当した。選手用医療は練習会場で7月31日～8月6日、競技会場で8月5日～7日に開設され、このうち私は練習会場2日間、競技会場3日間に参加した。選手用医療スタッフは医師・歯科医師・看護師・理学療法士・アスレティックトレーナー・ボランティアで構成され、練習会場および、競技会場の競技場内(Field of play、以下、「FOP」という。)と選手用医務室に配置された。

空手の選手用医療チームは、2018年に東京で開催された国際大会から本大会を見据えて構成された。2019年にもプレ大会と位置付けられる国際大会が開催され、選手用医療チームは両国際大会で救護活動の経験を共有し、各職種の役割や各個人のスキルを確認するなどコミュニケーションを深めてきた。さらにオリ大会プレイベント「Ready Steady Tokyo」ではオリ大会さながらの会場設営下に動線や医療資機材の確認、搬送シミュレーションを実施し、具体的な準備が進行していた。しかしながら2020年は空白の一年となり、2021年も大会開催が危ぶまれる中

でオンライン研修が継続された。その中で選手用医療チームが再び一同に会したのは、会場別研修が行われた直前の7月11日であった。

オリ大会期間中、選手用医療チームは円滑にコミュニケーションおよび役割分担できた。これは会場医療責任者や選手用医療統括者などのリーダーによる事前準備と、先述の大会における活動経験の賜と思われた。練習会場では医師1名、看護師1名、理学療法士1名で対応した。医師・看護師が症状を有する選手の状態確認を実施し、理学療法士が希望者に対し練習前のテーピングや練習後のアイシングを行った。一方競技会場では、負傷し選手用医務室を訪れた選手に対し、医師・看護師の対応を補助しつつ、交代でFOPの担架隊に加わった。連日シフトの初めに入念に搬送シミュレーションを繰り返し、大会中搬送を要する重症事例を生じが滞りなく対応ができた。

今回オリ大会に関わり、スポーツ(空手)を通して世界がつながる場面に立ち会う事ができた。その中でチーム形成のためのコミュニケーションスキルが、最も重要なスキルであると感じた。オリ大会では、他に類を見ないほど多くのサポートメンバーが関わる。そのためお互いを尊重しつつ自分の専門性を発揮する臨機応変な対応が求められる。理学療法士は各職種の専門性を理解してそのサポートをしつつ、理学療法士にできる事を明示して責任を持って対応する必要があった。さらには各国に帯同する医療スタッフと連携が必要になる場面があり、語学力も重要なコミュニケーションスキルであった。

理学療法士は、普段目の前の対象者に向き合いながらチーム医療の一端を担い、コミュニケーションスキルを磨いている。これはスポーツ現場においてもチーム形成の鍵となっている。

競技会場
オリンピック サーフィン

清泉クリニック整形外科

渡邊 純



私は2017年にオリ大会サーフィン会場選手用医務室の理学療法サービスコーディネーターに任命された。しかし、その後2021年5月に日本サーフィン連盟からオリ大会帯同依頼を受けたことにより会場選手用医務室からTEAM JAPANへ移って活動していた。

まず理学療法サービスを提供するにあたり、イメージ作りが一つの鍵となっていた。これまでサーフィン競技の世界大会では、会場医務室に理学療法やマッサージ、カイロプラクティックなどのサービスを開催国が主体となり併設することが通常行われている。東京2020オリンピック招致が決定した後の2018年と2019年は日本で世界大会が行われたため、オリ大会における理学療法サービスのイメージ作りには十分すぎるほど役に立った。そしてスタッフの招聘に関しては、幸い私のコンセプトを十分理解して頂いているスタッフを招聘したため大変心強く理学療法サービス体制が構築されたと自負している。また、コロナ禍におけるオリ大会開催だったため、通常のオリ大会以上のルール・規制が引かれ、コロナ禍

前に行われたテストイベントから大きく体制が変わった。そのため、ほぼスタッフ全員ぶっつけ本番という環境下で様々な事象に対する予後予測を行わなければならなかったことが難渋した点であった。

次にTEAM JAPANでの活動である。サーフィン競技会場は選手村から遠方に当たるため、日本選手団を始め多くの出場国は会場近くに居住を置いていた。日本選手団もJAPAN HOUSEを2棟構え、私の徒手スペースやトレーニングスペースも完備されていた。選手とは2021年5月にエルサルバドルでオリ大会選考を兼ねたWould Surfing Games(世界大会)が開催された時から帯同し、常にコミュニケーションを図ってきた。また帰国後の隔離中もスポーツ庁へ選手練習環境の整備と共に選手のケアに対する措置を受け、コミュニケーションを密にとることを心がけていた。その環境整備が功を制しオリ大会期間中も、毎日選手のケアを行う機会を得ていた。結果論ではあるが、選手のこれまでの努力と実力が実りオリンピック初競技の中、メダル2つを獲得できた。

今回、会場選手用医務室と日本選手団に関わり、これからの経験できないような日々を過ごすことができた。理学療法士人生の中でもかけがえの無い経験をさせて頂いたことに感謝すると共に、この経験を多くの患者や理学療法士に還元していけるよう日々精進したい。



競技会場
オリンピック スケートボード

日本大学

小山 貴之



オリ大会スケートボード（以下、SKB）競技会場の主任理学療法士兼アスリートケアコーディネーターとして、選手用医務活動を行った。SKB会場は有明アーバンスポーツパークにあり、BMX 競技と医務室を共有した。SKB は、手すりや階段など街中を模したコースを滑走するストリートと、窪地のコースを滑走するパークの 2 種目が行われた。2021 年 5 月 12～14 日に行われたテストイベントでは、医務室の運用や固定搬送方法の訓練を実施した。本大会では、種目ごとに公式練習 4 日間、試合日 2 日の計 6 日間の活動があり、ストリートが 7 月 21～26 日、パークが 7 月 31 日～8 月 5 日の計 12 日間を理学療法士 9 名によるシフト制で運用した。理学療法士の延べ参加者数は、ストリートで 28 名、パークで 38 名であった。選手用医務チームは医師、理学療法士、看護師、アスリートケアアシスタント、一般ボランティア、事務職員で構成され、毎活動日のシフト交代時間に固定搬送訓練を実施した。試合日前日には、カメラリハーサルのもとで実践的な固定搬送訓練を実施した。ストリートでは階段

や傾斜上、パークでは丘の上や窪地の下での転倒受傷が想定された。このため、スパインボードとバスケストレッチャーを使用した全脊柱固定方法と、傾斜地やはしご上の搬送方法の訓練に時間をかけた。最も危険と考えられたのは、日除けの少ない競技会場での暑熱環境下の熱中症である。Heat Deck は SKB での運用はなかったため、アイスタオルと氷水を準備して対応することとしたが、パラソルの設置や飲料の大量提供もあり、熱中症となる選手は幸いにいなかった。大きな外傷対応は公式練習中の骨損傷の疑いが数件あったが、全脊柱固定による搬送を実施する場面はなかった。事前の想定と準備、対応方法の訓練が最も重要であり、貴重な経験となった。選手用医療チームスタッフ、その他競技会場スタッフのご協力のもと、無事に大会運営を終了することができたことに深謝したい。

競技会場
パラリンピック アーチェリー

愛知医療学院短期大学

加藤 真弓

私は、パラリンピック、アーチェリーの競技会場 / 練習会場選手用医務室（以下医務室）にて活動した。医務室は決勝戦会場近くかつ選手入退場の導線に沿っており、練習会場にも近接し救護に向かいやすい環境であった。医務室の役割は急性期対応であり、選手との接触を極力減らすために、コンディショニング等は基本的にポリクリニック対応であった。

アーチェリー競技は繊細で集中力を要することなどから、競技会場内や練習会場での医療スタッフの常駐はなく、練習会場周辺の巡回も一日 2 回程度であった。医療的問題の発生時は無線連絡が基本で、決勝戦時は、医務室内のモニターにて競技状況を観察し、速やかに対応できる体制をとっていた。競技特性上、急性外傷が少ないこともあり、理学療法士の主な役割として、医師が円滑に診療できるような後方支援を心掛けた。その時の状況により医師に同行、医務室準備、医療品準備の補助や記録など、臨機応変に各人が多職種と連携し対応した。大会期間中は、メールで理学療法士スタッフ間の情報共有を図り、円滑な活動に繋げるよう

にした。大会前の事前準備は、情報の少なさと医療逼迫状況下で他職種との連携が難しく準備に困難さがあった。理学療法士スタッフが安心して参加できるよう随時メールで情報共有し、チームとしての活動のために顔の見える関係づくりとして、Zoom を用いたミーティングも数回実施した。

結果的に、今回は競技特性もあり急性外傷対応はなく、そして心配された熱中症対応もなく、医務室では選手以外の対応のみであった。

今回、オリンピック、アーチェリー競技医務室の主任理学療法士の先生をはじめ、チームメンバーの方のご協力により、オリンピック時の取組みを情報共有いただいたこと、また医務室運営の土台を築かれたことが、パラリンピック時の医務室の円滑さに繋がった。そして、選手対応の機会はなかったものの、理学療法士は理学療法しかなというスタンスではなく、対象者がスムーズに医療を受けられるよう、多職種と関係を築き後方支援できたことは、参加メンバーの一人ひとりの柔軟な対応力とコミュニケーション力によると考える。



競技会場
パラリンピック 陸上

帝京大学スポーツ医科学センター
廣重 陽介



私が主任理学療法士を務めたパラ陸上競技においては、日本で初めて組織的な医務活動を行った大会となり、40名の理学療法士を含む総勢100名のメディカルスタッフが大会を支えた。

主任理学療法士としての活動は、2019年5月に日本障がい者スポーツ協会、日本理学療法士協会の推薦をいただいたことにより始まった。以降、メンバーの人選をオンラインの面談で決定し、おおよそのメンバーが固まった。その後周知のコロナ禍で、組織委員会との情報共有、トレーナーの対面での研修や大規模なテストイベントは制限され、事前に十分な情報の受け与え、技能を高めていただいた状態で本番を迎えることが難しくなった。加えて、直前まで人材確保が流動的な状況で本番を迎えた。

理学療法士の活動内容としては、オリンピックスタジアム（大会会場、そのウォームアップトラック、代々木、江戸川陸上競技場（練習会場）にて競技・練習中の事故発生や事故防止に向けた観察、応急処置、医務室への搬送、医務室での診療補助等であった。本大会中に発生したアクシ

デント（外傷）は競技特異的な外傷（例：スプリンターのハムストリング肉離れや投擲選手のサークル内での転倒による外傷）、選手の元来有する障がいが原因で発生した傷病（例：暑熱環境下における脊髄損傷選手の自律神経障害に伴ううつ熱症状、ブラインド選手の段差での転倒に伴う足関節捻挫）、その他（視覚障害選手のガイドランナーにおける外傷発生、暑熱環境下の熱中症）、などその種類は多岐にわたった。また、COVID-19濃厚接触者指定選手の搬送や医療対応時の配慮など、コロナ禍特有の対応も求められた。1) Field of Play（競技場内）の救護観察、搬送のスキルと大会レギュレーション、2) 選手が元来有する病態や障害、3) 発生しうるスポーツ外傷・障害、4) 実施競技の動作やルール、これらの理解と実践が求められ、理学療法士の専門性を存分に発揮する機会であった。

競技会場
パラリンピック カヌー

高崎健康福祉大学
中川 和昌



私はオリ・パラ大会において、パラカヌー会場の主任理学療法士として、医務室、競技会場を担当した。開設期間は2021年8月28日（土）～9月4日（土）（競技は9月2日（木）～4日（土））であり、そのうち7日間私は参加した。主任理学療法士としての主な役割は、選手用医療責任者と組織委員会会場医療事務責任者と連携しながら、期間中の理学療法士の決定および配置、マネジメントであった。

まずは事前準備として数回のスタッフミーティングや勉強会を開催した。新型コロナ感染拡大のため、事前の対面集合は困難であったが、メール、オンラインミーティング、SNSを利用しながらチームビルディングに従事した。また競技会場内の対応マニュアルを作成し、事前にその内容をスタッフ間で共有した。大会直前にはスケジュール確認や、期間中の行動計画を再確認した。

大会期間中は毎朝、ミーティング後に救急搬送のシミュレーション、搬送練習を実施した。選手が会場入りし、ウォーミングアップや練習が始まると同時に競技会場、医務室に理学療法士を交代制で配置し活動した。

業務終了後は物品や人の配置計画、一日の仕事の流れと対応等の記録を行い、報告書としてまとめると同時に、日々のオンラインミーティングで活動時の注意点やリスクマネジメント等を申し送り、情報共有に努めた。大会期間中、毎日このミーティングを実施したことで、活動に伴う不明瞭な点や救護や搬送の改良手順を確実に引き継ぐことができ、スタッフの連携力と一体感も向上したと思われた。

またカヌー競技は、水上・水中の救護対応時に水際の引継ぎがあるため、東京消防庁の水難救助隊、ライフセーバー、救急隊も加えた搬送練習を毎日実施した。大会最終日にレース後の発作症状で転覆した選手の救急搬送に対応したが、現場での引継ぎや搬送場面を想定し、緻密な連携下での調整を事前に実施していたからこそ、迅速かつ正確な対応ができた。救急対応はスポーツ理学療法士において、国際的に必須とされているスキルであり、普段病院や施設での臨床業務が主である理学療法スタッフにとっては、あまり経験できないことが多い。今回、準備も含めた現場での救急対応をオリ・パラ大会という大きな国際大会で体験できたということは、参加した理学療法士にとって良い経験であったと思う。

競技会場の救護において考えるべき手順や連携は数多く存在し、さらには新型コロナウイルス感染症対策も重なり、事前準備から期間中の対応まで非常に大変であったが、全てのスタッフの協力の下で、非常に良いチームで乗り越えることができたと自負している。今回一番私が感じたことは、アスリートへのサポート活動は直接的なものだけでなく、「チームとして大会や選手をサポートする」活動も非常に重要な仕事である、ということであり、そのためのマネジメント能力も大きな大会における理学療法士の役割として重要であると思われた。



競技会場
パラリンピック サイクリング

順天堂大学医学部附属静岡病院
小林 敦郎



私は、東京 2020 オリ・パラ大会において、自転車競技会場（静岡県開催）における選手用医療サービスに関わらせて頂いた。静岡県で自転車競技が開催されることになったのが 2016 年、何か理学療法士として協力できなかなと思っていたころ、パラサイクリング日本代表チームのトレーナー経験もあることから、会場選手用医療サービス、とくにパラ大会においては、主任理学療法士として活動させてもらった。

それからは、会場の医療責任者の医師との連携、大会組織委員会、自転車競技連盟との調整、大会参加希望の全国の理学療法士の選考、全日程のシフト調整、各事前研修会の講師や運営なども行った。さらには大会までに日本理学療法士協会が主催するスポーツ理学療法研修会や、静岡県理学療法士会内で多くの研修会を重ね本番へと準備を進めた。しかし感染拡大による大会の 1 年間の延期、直前まで大会が開催されるかわからない状況にスタッフの辞退も相次ぎ、さらに感染対策の準備も行う等様々な問題を抱え本番へ向かうことになった。

静岡県内での自転車競技は、ロード、MTB、トラックの 3 つの競技あり、ロードは小山町にある富士スピードウェイ、MTB とトラック競技は伊豆の国市にある MTB 特設コースと伊豆ベロドロームにて開催された。それぞれの競技特性に応じた医療サービス体制を構築して行かなくてはならず、ロードでは長時間屋外で行われ、熱中症も危惧されるためアイスバスの用意、MTB では山岳コースのため、コース全体にブラインドの部分が多く、よりチーム連携が重要であり、トラックでは接触による落車が多発する競技のため、迅速な救急対応、搬送が必要であった。

これらを踏まえて、大会期間中は、各救護所には医師、看護師、理学療法士がチームとなり配置され、その役割や動線の確認を行い、共同して大会に望んだ。また、選手が会場に集まる前の早朝、毎日救急搬送の練習を行いその対応に備えた。実際のコンディショニングやテーピングなどの理学療法は多くはなかったが、頻回に落車などが発生し迅速な救急対応が求められた。それまでの準備を行ってきた甲斐もありチームとして十分な対応ができたと思っている。

世界のトップレベルの選手や、世界中の様々な障害を持った選手を、間近でみられたことはかけがえのない経験となった。この大会を通じて得られたことは大変貴重であり、今後のスポーツ理学療法に行かせるものと思っている。今振り返ってみれば、大会期間はあっという間のことであり、それまで長期間にわたり、多くの方々と出会い、多くの研修会を通して得られたことが、何事にも変え難いレガシーなのかもしれない。

最後に、オリ・パラ大会に参加頂いた全国から集まった理学療法士の方々、大会組織委員会、自転車競技連盟の皆様へ感謝するとともに、これからの我国におけるスポーツ理学療法の発展を願い結びとさせていただきます。

競技会場
パラリンピック 5人制サッカー

長野保健医療大学
赤羽 勝司

私は、パラリンピック大会 5 人制サッカー会場の主任理学療法士として、医務室および競技会場を担当した。開設期間は 2021 年 8 月 24 日（火）～ 9 月 4 日（土）（競技は 8 月 29 日（日）～ 9 月 4 日（土））であり、このうち 10 日間に参加した。

大会期間中は、日替わりで 8 名の理学療法士が対応する予定だったが、参加可能な理学療法士 9 名で労働規定条件下での調整は非常に困難であり、試合日には 6 : 30 から 22 : 30 という参加であった。

大会準備は、開催の可否を心配することから始まり、選手用医療責任者の変更、理学療法士の参加辞退、会場担当者の変更、競技会場はオリンピック大会終了後に建設される等の様々な状況があり、事前研修で環境把握もできぬまま情報共有を統括する役割だったが、打ち合わせを十分に行うこともできず、直前まで不安なままでの参加となった。

理学療法士の活動として、競技会場での救急処置と搬送が主な活動であり、医師や看護師と協働してサポートした。2 交替制で理学療法士を

配置し、各出勤時には毎日全スタッフでスクープストレッチャーを用いての搬送業務を確認した。救急救命士養成校の学生も参加していたため、詳細に確認することができた。COVID-19 感染対策として、医療業務以外に試合会場およびウォームアップエリアの両サイドラインの壁やベンチを、使用ごとに消毒液の噴霧と拭き取り作業を会場係と協働してサポートした。

実際に筋挫傷による選手の搬送は行われたが、搬送してからの医務室での処置は医師や看護師とともに速やかに対応することができ、救急隊へ引き継ぐことができた。また負傷した選手のチームドクターが医務室にて処置をおこなったが、直接関与することはなかった。テーピング施行の依頼は数件、マッサージ等の徒手療法を求められることはなかった。基本的に各チーム帯同のトレーナーが対応しており、競技会場の医務室を利用する選手は救急時のみであった。

救護・搬送は、理学療法士の臨床場面では通常経験することは少ない。しかし、今後スポーツ現場で活躍する理学療法士が増加することからも、救護・搬送のような救急対応も敏速に対応できるようになることにより、更に活躍の場が広がるのではないかと考えられた。



競技会場
パラリンピック ゴールボール

西川整形外科
豊岡 毅



私はパラリンピック幕張会場におけるゴールボール競技の主任理学療法士として競技会場を担当させて頂いた。競技開催期間は 2021 年 8 月 25 日(水)～9 月 3 日(金)であった。競技会場のサポート体制は、医師 1 名、理学療法士 1 名、ヘルスケアボランティア(看護師や学生など様々)数名によりチームが構成されており、全日程を通じて午前と午後の 2 交代制シフトで対応した。

事前の準備としては、登録された理学療法士が 4 名であったが、全員ゴールボールのサポート経験が乏しかったため、ミーティングを重ね、知り合いのゴールボールチームに外傷の発生内容を聴取することや、海外のゴールボール競技における障害発生報告論文を手に入れるなど様々な準備を行なった。また、2019 年 9 月に開催された 2019 ジャパンパラゴールボール競技大会は本番と同じ幕張会場を使用していたことから、組織委員においてテストイベントと位置付けられていたため、こちらにも足を運び、組織委員会の会場医療計画担当者と搬送経路の確認などを行った。

また、この際に遠方から会場の医療サポートに来ていた統括医師と顔合わせも行うことができたため、貴重な機会を得ることができた。

当日を迎えるまでの準備期間は、想定よりも長くなり、COVID-19 に影響されながらも困難を乗り越えて一致団結し、一人のメンバーも欠けることなく大会を無事に終えることができた。これはサポートチームのメンバー一人一人の献身的な努力はもちろんのこと、彼らの家族や職場に寛大な理解があつてのことであり、どんなに感謝しても足りない。今回の経験は地域の障がい者スポーツサポートに大きな変化をもたらすのみならず、職場における他職種連携にも活かすことができる貴重な経験であった。この経験は携わったすべての人にとって貴重なレガシーになったことと思われる。

競技会場
パラリンピック 柔道

鶴田運動機能回復クリニック
峰松 一茂



私は、コロナ禍においてパラリンピック柔道競技(以下パラ柔道)に理学療法士主任として参加した。

大会準備として、個人としては、事前研修会の参加、県士会での研修会等の参加を行い、事前 e-ラーニング等を受講した。主任の立場では、組織委員会の参加スタッフ(理学療法士)選考において面談(オンライン)、スタッフ決定からのチームビルディング、シフト作成等のマネジメントを経験した。

パラ柔道は視覚障がい者柔道であり、参加選手は弱視あるいは全盲の選手である。組み合ってから競技開始という特別なルールはあるが、階級分けや試合時間、そして勝敗の判定は概ねオリンピック柔道競技と同様である。

大会のメディカルサポートは会場における選手用医療サービスを担当し、全国から集まった医師・理学療法士・アシスタントケアスタッフ(柔道整復師等)・看護師で構成され、競技会場(以下 FOP)・選手用医務室・ウォームアップエリアへ配置された。FOP での対応は 2 分以内とされ、的確な処置、安全で素早い搬送が求められるため、午前と午後のミーティ

ング後に、搬送方法など綿密なシミュレーションを時間のゆるす限り実施し本番に備えた。

理学療法士の役割は、FOP においては医師の補助役、選手を医務室へ搬送する担架隊が任務で、医務室においては医師の診察後の処方に基づきテーピングやアイシングの処置などを行った。また、選手用医療は大会会場から離れた公式練習会場にも設けられ、大会初日の 5 日前から開設された。そこでは濃厚接触者を練習会場に受け入れなければならないといった対応も運営側に求められ、具体的手順を提示し、いかに大会参加選手を安全に練習させるか、濃厚接触者も差別無く練習させるかという難題にも直面した。その際、医師と協議のもと、会場の消毒はもちろんのことゾーニング、練習スケジュール調整、選手送迎バスの発着時間配慮に至るまで行い、感染対策のマネジメントも経験した。

コロナ禍の世界大会ということもあり、濃厚接触者もフィールド内に存在していた。FOP での選手対応は PPE(Personal Protective Equipment)が用いられ、大会を安心・安全に開催するために、選手及びスタッフは、参加期間中毎日 PCR 検査を受けた。

今回、コロナ禍における大会で競技会場での活動を経験し、より安全な大会運営にむけて、医師を中心にチームとして活動を行うことができた。活動中は、感染「しない」「させない」「持ち帰らない」を意識し、行動ルールの順守・徹底に努めた。

最後に、大会準備等からアドバイスを頂いた片寄先生をはじめ運営スタッフの方々、パラ柔道競技のメディカルスタッフの方々のおかげで、私の任務を遂行することができた。また、コロナ禍というなか、現場に派遣許可をいただいた職場の皆様に熱く感謝する。



競技会場
パラリンピック
パワーリフティング

富士リハビリテーション大学
赤岩 龍士



2021年8月20日～30日の11日間、東京パラ大会パラ・パワーリフティング競技会場主任理学療法士として全日程に参加した。パラ・パワーリフティングは、脊損者や下肢切断者、低身長者などによる「ベンチプレス競技」で、体重別男女それぞれ10階級に分かれ32か国総勢180名の選手が参加した。

東京国際フォーラム（TIF）を競技会場とし、医師10名、看護師13名、理学療法士7名、ボランティア5名が2シフト体制で選手や関係者の医療安全対応を行った。医務室は本部、4階競技会場、4階ウォームアップエリア、地下2階練習会場、4階医務室の5か所に設置され複雑な動線に慣れるまでに時間がかかった。業務はアイスパック準備、設備消毒、救急隊を交えた選手搬送訓練を毎日実施した。練習会場では感染防止の呼びかけとともに各国の選手やトレーナーとコミュニケーションをとり、会場医療が利用しやすくなるよう心掛けた。

印象に残ったこととして、英語圏外の脊損選手への対応が挙げられる。

通訳不在で翻訳機もうまく機能せず、身振り等での訴えや症状の確認に苦慮した。医師の判断は手関節捻挫疑いで、念のためシーネ固定となったが頑に拒否をされていた。その様子から、車いす操作が困難となることを察し、医師と協議の上テーピング固定に切り替えたところ、とても喜ばれたことがあった。ニーズに応え疼痛を確認しながらの対応は、想像力の重要性を再認識することができた。

また、今大会において、会場責任者として医療スタッフのチームビルディングを重点に準備を進めてきた。大規模な国際大会での活動は、スタッフ間の連携とコミュニケーションが重要な要素と考えられる。2年前のテストイベントの時より、統括医師や医療チームとのSNSでのコミュニケーションを継続し、1年延期となった際もスタッフのモチベーションは維持され、理学療法スタッフは一人も欠けることなく全員参加し、連携のとれた業務実施に至ったと実感できた。

パラ大会を通して、パラスポーツには理学療法士の関りが必要とされており、パラスポーツを広める役割としても適職と再認識できた。理学療法士養成課程や卒後教育の中で、パラスポーツの魅力や必要とされる知識技術を共有し、人材育成することが今後の課題といえる。そして、今大会によってパラスポーツや障がい者、多様性などのキーワードが世に広がり、社会的認知のきっかけとなったパラリンピックムーブメントを、風化させず、障がいのある方々がスポーツを行うこと、社会参加することが世の中に「当たり前のこと」として根付くよう継続的に活動していくことが次の責務と感じている。

競技会場
パラリンピック 射撃

松本市役所
田口 真紀



私は、「パラ射撃」の大会期間前に主任理学療法士として、大会期間中に Venue Chief PT として3日間、「ボッチャ」会場の大会期間中にメディカルスタッフとして2日間、合計5日間参加した。

「パラ射撃」の医務室開設期間は、練習期間8月25日（水）～8月29日（日）の5日間、大会期間8月30日（月）～9月5日（日）の7日間、合計12日間で7名の理学療法士（うち3名が医療機関外勤務者）が携わった。シフトは、各日、医師2名、看護師1名、理学療法士3名の体制で、理学療法士は3泊4日を基本とし調整した。

他競技と異なることとして、会場が埼玉県朝霞市のため選手村から離れているという物理的な距離による課題があり、また、関与する理学療法士は全員が「パラ射撃」に初めて触れる状況で、私以外はパラスポーツ全般に関しても経験が少ない状況であった。その中でも「パラ射撃会場を理学療法士として皆で乗り切る」というチームワークが取れるように心がけた結果、団結力を高められたと感じた。具体的には、個々でメー

ル相談対応、大会前に理学療法士全員で2回会議を行い、オリ大会射撃に急遽配置された理学療法士を交え具体的な情報を得て、会場入り後の相談や情報共有体制を整えた。

現地での活動は、様々なことを医師・看護師と共に考え、頻繁なやり取りを行い、組織委員会の事務者に随時報告を行った。

毎朝、救急隊と観客医務室対応スタッフを含めたブリーフィングを行い、当日の外気温や選手村も含めた感染症発生状況等の情報共有を行った。大会期間中の前半は熱中症対策（ラウンド時水をクーラーボックスに入れて試合会場・練習会場に加え、駐車場も巡回した）、後半は低体温症対策（PPE ガウンを毛布の代用品とした）が必要な天候であった。業務中は常にトランシーバーを身に付けていたが、競技会場内では競技中にスタッフは耳栓着用を求められたため、他会場のイヤホンとは異なる形状であったことも競技会場の特性であると感じた。

今回は、個々が動きやすい体制で臨むための要望を隠せず組織委員会へ伝えたこと、医師との連携、事前顔合わせの実施等で、スムーズな医務室運営が出来たと思う。今後は、この貴重な経験をもとに今まで以上にパラスポーツの普及啓発を理学療法士の視点で行っていきたい。



競技会場

パラリンピック シットイングバレーボール

北播磨総合医療センター

三星 健吾

シットイングバレーボール会場主任理学療法士に任命された時は、光栄なことと身の引き締まる感覚を今も覚えている。大会開催に向け選手用医療統括者の先生や組織委員会の方々と頻りに WEB にて救護体制について入念な会議を重ねた。また理学療法スタッフとして参加希望される方々の面接を行った。皆さん素晴らしい実績の持ち主で心強く感じた。しかし、準備が整った矢先に新型コロナウイルス感染症により大会は迷走した。対面での研修は WEB 研修に置き代わり、大会直前まで現場の詳細は分からないままであった。そんな中オリンピック大会が開催された。日本人選手の大活躍により世間の声も肯定的なものに変わっていった。しかし、感染者数は右肩上がりに増え、パラリンピック大会直前には東京で一日 5000 人を超えていた。スタッフの中には、所属先や家庭の事情により、参加を辞退された方々もいた。大会が始まり全国から集まってきた理学療法サポートスタッフの方々の不安な思いを肌で感じた。主任として、スタッフ一人一人と丁寧にコミュニケーションを図り、役割分担を明

確にすることを常に念頭に置き行動した。競技会場の勤務時間は 7 時 45 分から 23 時、試合が延長すると 24 時になることもあった。1 日の流れは新型コロナウイルス感染症検査から始まった。万が一、陽性反応が出れば 2 週間隔離される。今までの準備が水の泡と化すと考えると怖かった。他のスタッフも同じ思いだったと思う。次に朝礼にて、当日のタイムスケジュール、昨日のサポート内容や注意事項など共有した。情報共有に続き、緊急搬送の実技練習を毎日行った。普段、理学療法士が関わることが少ない搬送作業のため、はじめはごちそう戸惑うスタッフも多かった。しかし、医療統括者の的確なご指導と反復練習により目標となる時間内で搬送をすることができた。

競技が始まった。国際大会ならではの激しく目を見張るプレーの連続であった。その分外傷・障害の発生も少なくなかった。その都度医師の指示のもと適宜対応した。対応内容は、電子カルテに記載されポリクリニクのスタッフと共有した。各スタッフが、適切かつ臨機応変に対応し世界に通用する理学療法スキルを発揮することができた。

一方、活動を通じての課題は、英会話によるコミュニケーション能力をいかに高められるかが、国際大会では重要と感じた。その点が改善されれば、選手の痒い所に手が届く理学療法サービスを提供出来ると考える。

最後に本大会は、新型コロナウイルス感染症により世界から集まった選手や我々関係スタッフすべてが不安を抱えた状態で開催された。しかし、逆境が人を強くすることを目の当たりにした大会だった。このような不利な状況下でも理学療法士として力を発揮するには、普段の取り組み方や、前向きな考え方がいかに大切なのかを再認識できた。本大会に参加できたことを誇りに思う。

競技会場

パラリンピック 卓球

岡田整形外科

松元 春香



私は、パラ大会卓球競技会場の主任理学療法士として、医務室、競技会場、練習会場を担当した。開設期間は、2021 年 8 月 20 日（金）～9 月 3 日（金）（競技は 8 月 25 日（水）～9 月 3 日（金））であり、このうち 9 日間活動した。

私は理学療法統括として、組織委員会や医師、オリ大会の理学療法統括との連携を図り、卓球競技会場における理学療法士のシフト作成、マニュアル作成及び研修会を企画した。また、各理学療法士と面談しそれぞれの特性や資格に応じて研修班・マニュアル作成班の 2 つに振り分けた。

研修会は研修班が中心となり、4 ヶ月間毎週 1 回オンラインにて実施した。内容は、パラ大会卓球競技に特化したテーピング・理学療法評価・応急処置・パラリンピック選手に予測されるリスク管理・英語である。マニュアル作成は、パラ大会で必要となる項目を予め選択し、オリ大会のマニュアルに追加する形で、競技会場と練習会場の 2 会場の作成を行った。

大会期間中は、日替わりで対応する 14 名の理学療法士が、現場活動に円滑に入れるよう SNS 等を活用して情報共有を図った。また、試合中の外傷や試合会場への移動時の緊急対応に対して、医師のサポートや備品の準備・管理を行なった。その他試合直前でのテーピング実施や転倒受傷後の松葉杖調整・指導、熱中症疑いに対して医師や看護師及び組織委員会とのパイプ役として活動した。今回の活動を通して工夫した点は、スタッフ間の連携である。コロナ禍のため現地での研修会が中止となり、遠方から参加するスタッフは、大会参加当日に初めて現地に赴くスタッフもいる状況であったが、オンラインにて顔を合わせていたことで、大会当日はスムーズな連携が図れたと考える。また、大会当日までには全理学療法スタッフが一定水準の知識と技術を習得し、安心して大会当日を迎えることができた。

大会終了時には、パラ大会卓球競技会場スタッフとして関わった事で、『新しい目標』を持つことができたという前向きな言葉を全スタッフから聞くことができた。オリ・パラ大会が 1 年延期になったことで、度重なるシフト作成や組織委員会等との事前打ち合わせや面談と、育休明けでの対応となった私には大変嬉しい言葉となった。

今回の経験及び作成したマニュアルは、今後、国内で開催される国際大会において会場スタッフ間の連携および運営に貢献できるものと思われる。また、2027 年宮崎県で開催される国民体育大会（宮崎国スポ、障スポ）に向けた各会場における理学療法士の役割及び取り組みの一助にしていきたい。



競技会場
パラリンピック テコンドー

広島大学

浦辺 幸夫

【はじめに】

テコンドー Taekwondo は韓国発祥の格闘技で、日本の空手に似ている。今回、パラリンピックで正式種目として採用されたパラテコンドーの医務担当を行った内容を報告する。

【大会に向けた準備】

2019 年 8 月から理学療法士協会から選任されたスタッフに加え、試合のある幕張メッセ会場を擁する千葉県の理学療法士で計 10 名のチームで準備を始めた。2019 年 9 月にはプレ大会が開催され、本番 1 年前で機運が高まってきた。ところが、新型コロナウイルス感染症発生以来、2020 年の予定は全てキャンセルされ、2021 年 7 月から大会開催に向けて急に準備が再開された。Web で必要な情報交換を頻繁に行った。私は水泳競技にも関わったので、7 月末に行われた大会のサポートの様子を各スタッフに伝えたことで、臨場感が湧いてきたと思う。

【大会本番】

練習会場は東京都目黒区内に設けられ、少しずつ大会に向けた緊張感が高まってきた。9 月 2 日から 4 日までの 3 日間幕張メッセ会場業務

を行った。理学療法士の割り当て枠は 1 日 2 交代で各 1 名であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で理学療法士以外の参加スタッフのキャンセルが相次いだ。それで、急遽予定枠外のサポートを理学療法士に依頼したところ、皆さん快諾してくれた。医師、看護師の欠員枠を見事に理学療法士が埋めて、代替の業務も遂行できた。これについては、多くの部門から賞賛を受け、また理学療法士同士でも「私たちのチーム力すごいね」ということになった。

今回の業務内容で特筆すべきは、本来の医務室の業務に加え、通常は大会役員が行う「試合で使用するテーピングのチェック」を私たちに任せられたことである。レギュレーション違反は失格にもなりかねず、依頼された時にはスタッフ一同凍りつく感じであった。規約を説明した英語のポスターやマニュアルを読み込み、万が一にも失敗が許されない状況であった。最初たどたどしい英語でおっかなびっくり選手とやりとりしていた理学療法士が、少しずつ饒舌になり、適合違反の選手に指示命令を行うまでになった。私は、サポート役に回ったが、日々スポーツ場面とは異なる仕事をしている理学療法士のそれぞれのポテンシャルの高さを実感した瞬間だった。環境の設定が変われば、活き活きする。スポーツ現場はそのきっかけなのだ改めて実感した。

【夢の終焉】

数年間暖めてきたことが、ここに結実した。「未来へのレガシー」ということをいつも意識していたが、これまでに述べた 1. チームとしての結束力、2. ポテンシャルの高さ、の 2 点が理学療法士が自信を持つてよいものだった。それで、今回の記録を編集して冊子にまとめた。3. 記録を伝えること、も重要なことであろう。

以上、断片的ですが、この報告が今後のスポーツ理学療法士の発展に寄与できればと願っています。

選競技会場
パラリンピック
車いすバスケットボール

広瀬医院

田村 耕一郎



私は、パラ大会車いすバスケットボール会場の主任理学療法士として練習会場、競技会場の医務活動を担当した。練習会場は東京ビックサイト、競技会場は武蔵野の森総合スポーツプラザ、有明アリーナであった。開設期間は東京ビックサイトが、2021 年 8 月 20 日（金）～9 月 5 日（日）、武蔵野の森総合スポーツプラザが 2021 年 8 月 21 日（日）～29 日（日）、有明アリーナが 2021 年 8 月 21 日（土）～9 月 5 日（日）、合計 17 日間であった。計 18 名の理学療法士が参加し、このうち 12 日間に私は参加した。

理学療法士の配置は、東京ビックサイト医務室に 1 名、武蔵野の森総合スポーツプラザと有明アリーナでは医務室に加え、ウォーミングアップエリア（以下「WUA」という）、競技フィールド（以下「FOP」という）、にそれぞれ 1～2 名ずつであった。

練習会場医務室には医師が配置されなかったため、初期対応や搬送有無の判断が求められた。

競技会場の医務室では、医師の診断や指示のもと、応急処置、テーピング処方が主な役割であった。コンディショニングサービスは実施せず、希望者には、選手村総合診療所の利用を促した。

競技会場の WUA と FOP には医師、看護師、理学療法士が、競技中の重症事象、外傷初期対応、搬送目的で待機した。

事前準備として、理学療法サービスマニュアルを作成した。理学療法士の役割、服務規程、救急対応フロー、CPR+AED、頭頸部外傷対応と搬送法、外傷対応、テーピング、英語対応の内容で構成した。車いすバスケットボールの競技特性や外傷・障害特性を盛り込み、対応場面を想定した内容とした。

開設前より、SNS や Web 会議を活用し情報共有を行なった。期間中は、さらに、仕事の流れ、運営留意点、処置に関する申し送り事項を積極的に発信し合った。

会場別研修を実施できなかったため、オリ大会で同会場を利用した競技担当者より、事前に会場の情報提供を得た。搬送経路、搬送方法、濃厚接触者対応方法については、活動当日に実技練習を行い、共通認識を高めた。

開設期間中、救急搬送事例はなかった。理学療法士は、競技中のテーピング、競技前テーピング、競技後ケアに携わった。対象部位は、下腿部、肘関節、手関節、手指であった。

活動期間中は医師、看護師、理学療法士、ボランティア、事務担当者全てのスタッフが同じ目標に向かって協働できた。より安全で機能的なオペレーションを構築するため、共に意見し合い、改善し続けたことはチームとして理想的な形であり、達成感を感じた。

他職種からは、テーピング等の競技を行うための処置について、理学療法士の対応能力と機動力に全幅の信頼をいただいた。また、運営やマネジメントを含めた貢献も高く評価された。その結果、医師より、今後の車いすバスケットボール国内大会、国際大会の競技会場医務活動に、理学療法士の参加を依頼された。我々の活動が、今後のスポーツ環境改善に繋がるレガシーを生み出した事が感慨深かった。



競技会場
パラリンピック
車いすフェンシング

新渡戸記念中野総合病院

伊藤 弘崇



私は、パラリンピック幕張メッセ会場で開催された車いすフェンシング競技を担当した。対応期間は、2021年8月20日（金）～29日（日）における計10日間（練習期間5日間、試合期間5日間）であった。

事前準備として、関係スタッフとの連携をはかるために、メールによる頻回な意見交換やオンラインミーティングを開催した。車いすフェンシング競技に関わった経験がなく、各々競技を知ることから始めた。さらに、テスト大会が開催されず、国際大会の雰囲気や活動内容の情報がなかった。そのため、会場の雰囲気を知るためにオリンピックのフェンシング競技の映像等を参考にした。

大会期間中スタッフ間での情報共有は、メッセージングアプリを使用して、練習会場医務室、選手用医務室、Field Of Play（以下、「FOP」という。）での状況、試合進行具合や各スタッフの配置状況などを共有した。

理学療法士の活動として、練習会場医務室、選手用医務室、FOPでの選手・スタッフへの対応を医師の指導のもと行った。練習会場では、各

国ともトレーナーが帯同しており、対応は少なかった。選手用医務室では、上肢の慢性障害に対するテーピングやマッサージなどの対応をした。FOPでは、剣による攻防が激しいために起こる打撲が多く、医師とともに競技が行われるピストに上がり対応した。準備において、車いすフェンシング競技における外傷、障害の報告が少なく難渋した。今後、外傷、障害の報告の蓄積により、よりの確な準備、対応が可能となると感じた。

今大会に携わり車いすフェンシングだけでなく、パラスポーツに参加する選手が積極的に、安心して競技に参加できる環境を整えるために、理学療法士が重要な役割を担えると感じた。さらに、競技中に起こる外傷に対する応急手当は、限られた時間での対応が必要となるため、競技に合わせた準備と判断を磨く訓練が必要と感じた。

最後に、車いすフェンシング競技に携わったスタッフと一緒に活動したことも、一つのレガシーと考える。

競技会場
パラリンピック 車いすラグビー

旭川医科大学病院

塚田 鉄平



私は、パラ大会車椅子ラグビー競技の選手用医療班の主任理学療法士として、医務室、競技会場（FOP）、ウォーミングアップ会場を担当した。

開設期間は、2021年8月20日（木）～29日（日）で競技期間は8月25日（水）～29日（日）であり、私は全日程参加した。

事前準備として、外傷対応マニュアルの作成を行なった。対象選手の障がい特性は、四肢に障がい有しており、疾患は、四肢欠損、四肢切断、神経難病、頸髄損傷、脳性麻痺等である。

当競技は、車椅子同士でのコンタクトが認められており、笹代らはリオパラ大会の競技中の転倒を後方視的にまとめ、転倒は96回、方向は前方、側方、後方の順に多いと報告し、救護転倒に関しては不明であった。佐久間らは、受け身を取り損ねる事で前方転倒時に頭部外傷、頸椎・頸髄損傷の恐れ、後方転倒時は、後頭部打撲の恐れがあると報告している。さらに、当競技トレーナーからは特に障がいの重症度が高い選手の側方、後方への転倒に注意が必要との進言を受けた。

想定したアクシデントとして、転倒・衝突、車椅子に上肢が挟まれる事を想定し、脳震盪、頭部裂傷、頸髄損傷、頸椎捻挫、心臓振盪、肩関

節脱臼、骨折、打撲、皮膚裂傷、擦過傷、手指切断に対する外傷対応をまとめた。疾患特性による褥創、自律神経障害、熱中症も加えた。

選手用医療班のFOPでの介入は、選手が負傷し、審判がプレーを止め、チームスタッフのコートへの入場を許可し、チームスタッフから選手用医療班に要請があった場合に許可される。

スタッフへの事前講義として、起こりうる一番大きなアクシデントとして考えられた脳震盪、熱中症の判断に関して慈恵会医科大学の先生にweb講義を行って頂き、最終調整として当競技トレーナーに外傷対応マニュアルを元に、試合中に注意する観察ポイントを講義して頂き、ケーススタディも含めてトリアージ、搬送方法に関して議論を行った。事前講習会への看護師の参加はどちらも難しく、看護師の業務役割を確定させることが困難であった。

会場に参加したスタッフの総数は、医師5名、看護師12名、理学療法士11名、ヘルスケアスタッフ3名（HCS）であった。1日2シフトで1シフトに医師3名、看護師3名、理学療法士4名、HCS3名の配置であったが、看護師、HCSの人員不足が見られ、FOPでの搬送に関わるマンパワー不足を解消するため、理学療法士で補充を行った。FOPの対応に重点を置いたシフト表、タイムスケジュール表の改定を行い、チームビルディングのためシフト毎でAED操作、外傷処置、搬送練習を実施した。

実際、試合中の転倒が多数見られたものの、選手用医療班が出動する事例はなく、当会場での選手用医療班業務は終了するとともに、会場スタッフより『理学療法士の団結力は素晴らしい』との謝辞を頂けたことが誇らしい事であった。

最後に車椅子ラグビー会場選手用医療チーム、またコロナ禍において参加を快諾していただいた職場に感謝いたします。



競技会場
パラリンピック 車いすテニス

福井医療大学

久保下 亮



私は、パラリンピック大会の車いすテニス競技会場にて主任理学療法士を担当した。フィジオールームスタッフは総勢 27 名で、1 日 2 シフト体制(1シフト9名)で運営した。事前準備としてはマニュアルを作成し、スタッフ全員での事前打合せをオンラインにて行った。その際、オリンピック大会のテニス会場にて活動されたトレーナーに特別に講師依頼を行い、会場内での活動内容や注意点について伝達していただいた。

大会期間中は、各国の出場選手のケアはもちろんのこと、各国の選手やコーチ、スタッフからの要望のスムーズな対応を心がけて活動した。そして大会時期を考慮し、暑熱対策と新型コロナウイルス感染症対策のため、メディカルスタッフ（医師、看護師、理学療法士など）と大会組織委員会、ITF（国際テニス連盟）スタッフとの連携を密に取り、万全を期するための準備と行動を徹底的に行った。特に、メディカルスタッフ間の連携には細心の注意を払い、医師や看護師およびフィジオールームスタッフにて1日3回のブリーフィングを行い、アクシデントを起こした選手情報から会場内業務の

細部まで情報共有に力を注いだ。

私がパラスポーツ現場を経験する中で感じていることは、近年、パラスポーツのアスリートもハイパフォーマンスが要求されており、トレーニング内容も高いレベルが求められている。また、アスリート自身の原疾患や競技特性による外傷・障害への対応など、理学療法士の知識や技術が要求される場面は多くなっている。私は、パラスポーツに理学療法士が関わる意義が今後益々大きなものになると思っている。

このオリ・パラ大会はコロナ禍での開催であり、大会期間中の活動に細心の注意が必要であった。フィジオールームスタッフ一人一人の経験とスキルの高さに助けられ、より安全な活動に邁進しフィジオールームを運営することができた。このパラ大会を通じて得られた経験や素晴らしいスタッフとの出会いを、今後の活動に生かしていきたいと思う。更には、パラスポーツに関わる理学療法士の発展にも寄与していきたいと思う。

競技会場
パラリンピック ローイング

伊奈病院

遠藤 浩士



私は、パラ大会ローイング競技会場の主任理学療法士として、医務室と競技会場を担当した。主な活動場所は、ゴールエリアであるボンツーン（海と陸を繋ぐ棧橋）であり、開設期間は、2021 年 8 月 22 日（日）～30 日（月）（競技は 8 月 27 日（金）～30 日（月））であり、私は4日間参加した。オリ大会同様、活動場所は、海の森水上競技場における医務室活動と FOP (field of player) (以下、「FOP」という。)活動であった。

今回は、暑熱対応における活動が主であり、屋外競技ということもあり気温や湿度など天候による影響がかなり大きかった。FOP では、労作性熱中症、疲労困憊における脱力、意識朦朧とする選手の対応が多く、車椅子、バックボード・ストレッチャーによる搬送業務が中心であった。特に、搬送時においては各選手の個々の身体機能に応じた搬送方法や搬送時の介助手順など、事前に競技種目によるボートの特徴や身体に固定されているベルトの位置や場所をライフセーバーとの情報共有の中でチームとしての関りがとても重要であった。パラ選手は障がいを持っている事

を感じさせないぐらいに、すべてにおいて各個人が主体的自立的な行動であった。我々、理学療法士は、競技における支援のみならず、日常的な臨床場面における車椅子への移乗や補装具などの着脱など生活動作に関わることは、大会においてもとても有意義なことであったと実感した。今回、直接、医師からの依頼による理学療法士が選手のコンディショニングに関わることはなかったが、スポーツ現場において理学療法士の知識や技術だけに捉われず、一次救命処置、搬送手順、応急処置などの迅速な医学的判断に基づいた行動がとても重要だった。今後、スポーツ現場に参加される理学療法士は、まずはちょっとした勇気を持って参加し、経験することが大事であり、更なる「知識と技術と経験の蓄積」を個人個人が、日々、自己研鑽していく必要があると強く感じた。



日本代表選手団本部
オリンピック

横浜市スポーツ医科学センター
鈴川 仁人



オリ大会の日本代表選手団は本部にメディカルを配置し、選手団メディカルの統括及び中央競技団体（以下、「NF」という。）の後方支援を行なった。本部メディカルのトレーナーは3名でいずれも理学療法士と日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー資格を有していた。本部トレーナーの主な業務は、本部トレーナールームにおける選手対応、競技会場におけるNF後方支援、NF貸出トレーナールームやアイスバスの運用管理、その他本部員業務であった。

大会までの準備として、2つの国際総合競技大会に本部トレーナーとして帯同した。アジア競技大会（2018/ジャカルタ・パレンバン）では、本部メディカルの役割や業務を一から学んだ。トレーナールームにおいて大会期間中に初めてかつ継続して対応する選手に対し、どのようなアプローチが適切か、日々考えながら活動を行なった。翌年はユニバーシアード競技大会（2019/ナポリ）に同様の立場で帯同したが、活動スタイルは異なり、複数箇所の分村及び各競技会場に移動して選手に対応した。NFスタッフとの情報交換や競技スケジュールに合わせ、主体的に行動した。オリ・パラ大会は2020年の準備に続き、延期後の2021年からは、東京2020強化ミーティングや監督会議、メディカルスタッフミーティング、結団式や壮行会にオンラインで参加し、選手村の視察等も行なった。

大会期間中は開会式の1週間前に入村し、日本代表選手団宿泊棟1階に設置された本部トレーナールームで22日間の選手対応を行なった。6時～23時の各時間にホッケーやバスケットボール3x3、競泳、ビーチバレーボール、ハンドボール等12競技の選手のケアを担当し、その対応件数は前回大会（2016/リオ）の2.3倍であった。対応した部位では、骨盤・股関節が最も多く、次いで足関節・足部、胸背部、腰部・体幹、肩関節の順であり、治療内容の多くは徒手治療で電気治療や超音波治療も行った。この他、競技会場ではテコンドー及びグレイ射撃からの帯同要請に応じた。また、本部員業務として、日本代表選手の視察、NOCメディ

カルミーティングや閉会式にも出席した。

以上の通り、国際総合競技大会で日本代表選手団本部トレーナーを複数回経験し、その活動を行うために必要な資質を次のように整理した。

- ① 多種目の諸症状に迅速かつ的確に対応する経験とスキル
- ② NFを統括して後方支援するマネジメント能力
- ③ 一定期間のハードワークに耐えうる心身
- ④ 組織として活動する上での協調性
- ⑤ 臨機応変かつアスリートファーストな対応力
- ⑥ 語学力
- ⑦ 家庭や職場など周囲環境の協力

国際総合競技大会での活動を目標とする理学療法士へのレガシーは、主に三点である。まずはトップアスリートの対応経験を積むことである。スポーツ医科学専門施設やNFトレーナーとしての経験が必要となる。そのような環境では、不定愁訴やコンディショニング、パフォーマンスやトレーニングに関する様々な要望があり、それに応えることで求められるスキルを向上させることができる。二点目は資格についてである。医療資格の理学療法士に加え、アスレティックトレーナー資格を取得することが必要と考える。これにより、スポーツに対する理解が深まり、先述のアスリートが求める課題を専門的に解決できる。最後は分析やアウトプットの能力を身につけることである。トップアスリートから得られる貴重な情報を学術的に分析し、それをアウトプットすることで、理学療法士が担当する選手に還元できる。そのような能力を養うためには大学院教育を受けることも重要である。以上の見解は国際的にも共通であり、国際認定スポーツ理学療法士（RISPT）はまさにそれらの能力を担保する資格であり、今後日本国内での取得に向けて、日本スポーツ理学療法学会国際委員会の動向に着目されたい。



日本代表選手団本部
パラリンピック

東京保健医療専門職大学
鳥居 昭久



今回、パラ大会（以下、大会）における日本代表選手団の本部メディカル班のトレーナーとして、選手村の日本代表選手団宿泊棟にトレーナーブースを設営し、選手やスタッフに対する理学療法サービスの提供を行った。本部メディカル班は、医師3名、看護師3名、トレーナーは、私を含めた理学療法士2名が担当したが、日本パラリンピック委員会（以下、JPC）の専任トレーナーも東京大会期間中には村外から支援スタッフとして選手村でのサポートに入ってもらったので、実質、トレーナーは3人体制で対応した。トレーナーの3人は、ともに日本パラスポーツ協会公認障がい者スポーツトレーナー（以下、JPSAトレーナー）の資格を有する理学療法士であった。

私自身は、2012年のロンドン大会、2016年のリオ大会に引き続き、今回の東京大会で3回目のパラリンピック日本代表選手団への支援となったが、過去大会とは違って日本開催のメリットを活かした活動ができたと感じている。パラ大会では、多くの国内競技団体（以下、NF）関係スタッフの活躍や、選手村外の日本スポーツ振興センター（以下、JSC）拠点を有効に活用することができたことにより、本部トレーナーブースの利用者は、過去大会に比べて少なかったため、大会期間を通して、比較的落ち着いた対応ができた。

私たちは、選手団のサポートだったので、まずは、パラ大会前に、選手団内の各NFのスタッフとして登録されているトレーナーとの間でネットワークを作り、情報共有などを図った。NFのトレーナーは必ずしも理学療法士とは限らなかったが、基本的にJPSAトレーナー有資格者であったため、対応に対して共通認識があり、パラ大会に向けての準備を進めるこ

とができた。また、本部メディカル班の医師、看護師、JPCスタッフとの事前協議、選手村事前視察を何回か実施し、資材準備、感染対策などについての準備を行って、東京大会に臨むことができた。事前のオリンピック期間中に、日本オリンピック委員会（以下、JOC）の選手団スタッフからも村内情報をもらえたことも、事前準備には大変参考になった。なにより、メディカル班内のチームワークが非常に良かったことが大きなトラブルもなく対応できたことに繋がったと考える。

メディカル班は、大会直前、選手団入村に先立ち、JPC本部スタッフとともに入村し、日本選手団居住棟1階に医務室、トレーナーブースの設営、感染予防マットの敷設などを行い、順次選手を迎えることとなった。本部のトレーナーブースは、物理療法機器（電気治療器など）、テーピング資材、運動療法スペース、治療ベッドなどを配置した理学療法室としての機能を準備し、別室にJSC管理のアイスバスルームが設営された。パラ大会期間中は、医師からの指示による急性外傷に対するテーピング、物理療法、松葉杖処方などにも対応したが、選手からの多くのリクエストは、コンディショニングに関することが多く、これらに対して、ストレッチング、マッサージ、運動指導などを実施した。

今大会は、51個のメダル獲得他、多くの日本選手が入賞するなど、日本選手団の活躍は輝かしいものだった。その傍らで、選手の支援を行うことができたことは大変貴重な経験であり、この経験から得た知見を、学生や、多くの後輩理学療法士に伝え、今後とも障がい者スポーツの普及とともに、障がい者の社会参加に貢献したいと考えている。



日本代表選手団
オリンピック 空手

国立スポーツ科学センター
安東 映美



私は 2014 年から全日本空手道連盟の強化委員（医科学担当）、医科学委員、アンチ・ドーピング委員として活動している。オリ・パラ大会では空手競技のトレーナーとして選手村や日本武道館でサポートを行った。2021 年 8 月 2 日に選手村へ入村、8 月 5 日～7 日は空手競技日、8 月 9 日に離村というスケジュールであった。オリ・パラ大会での私の一つ目の役割は、空手日本選手団のチーフトレーナーであった。通常のトレーナー業務に加え、本部や日本武道館のメディカルスタッフ、パーソナルトレーナー等との連携や調整を行った。また、JOC メディカルスタッフ会議に出席し、特に感染対策事項に関しては情報を正確に共有することは意識した点であった。二つ目は、空手チームの COVID-19 対策におけるセカンダリーオフィサーである。空手では選手村に入るメンバー以外にも、映像スタッフ、練習パートナー、パーソナルトレーナーなど選手にとって欠かせない存在であり、そのような村外メンバーの COVID-19 対策も選手村内メンバー同等のものにする必要があった。セカンダリーオフィサーと

しての活動内容は、選手村内メンバーの PCR 検体提出のスケジュールリングや管理、村外メンバーに関する COVID-19 対策の立案と管理を行った。オリ・パラ大会の経験から、医師や看護師が帯同できないこともあるスポーツ現場では、理学療法士が感染対策のリーダーとして重要な役割を担う可能性を感じた。

大会期間中は、本部メディカル、パーソナルトレーナー、大会会場の医師、看護師、理学療法士との連携がとても良好だったことは私の強みであった。前職の病院で共に働いていた理学療法士の先輩や、アスレティックトレーナーの同期が大会救護として参加しており、これ以上心強いことはなかった。空手は東京開催のオリ・パラ大会が初めてオリンピック競技となった瞬間であり、その歴史の 1 ページに立ち会えたことはやりがいはもちろん、今まで支えてくれた家族、応援してくれた仲間、私を迎え入れてくれた空手界への感謝の気持ちに尽きる。

日本代表選手団
オリンピック 水泳競泳

東都大学
小泉 圭介



今大会の競泳日本代表トレーナーは、日本選手団内4名、選手団外サポートスタッフ5名の計9名で構成され、理学療法士は選手団内1名、サポートスタッフ（選手村担当）1名の計2名が参加した。

代表チームは2021年4月2週目ナショナルトレーニングセンター（以下 NTC）での第一次代表合宿から活動を開始した。競泳代表トレーナーの業務はマッサージケア・トレーニング指導が中心ではあるが、第一次合宿では理学療法士が中心となり身体測定およびコンディショニング評価を実施、問題点の洗い出しと改善に向けたコンディショニングプランを作成し、選手・コーチに対してフィードバックを行った。

今大会は国内開催であったことから、大会に向けての準備期間は各所属での強化・調整を基本とする方針が代表チームとしてとられた。代表トレーナーは、4月から7月までの間に月1回程度設定されていた合宿・調整レースに参加し、選手の状態把握とコンディショニングサポートを実施した。また、NTCで継続的にトレーニングしていた選手も多かったため、理

学療法士を週2回配置し、障害既往を有する選手の病態把握と対応、コンディショニング不良の早期発見と障害予防に努めた。

代表チームは高地合宿2回、調整大会参加2回を経て7月中旬NTCにて集合、7月末の開幕に臨んだ。大会期間中は、試合会場と選手村に理学療法士がそれぞれ1名常駐する様にトレーナーを配置、大会会場でのコンディショニングサポートのみならず、選手村でのトレーニング指導や徒手的アプローチにも対応できる体制をとった。

今大会の競泳代表チームでは、理学療法士は従来のトレーナー業務に加え、故障した選手の病態把握、身体評価、コンディショニングプラン立案と多岐に渡る役割を担った。競泳は、多職種のトレーナーと活動を共にすることが多い種目である。今大会では、其々の職種で得意とする役割を明確にし、お互いに業務分担することでより質の高いサポートが可能であったと考えている。この経験を基に、競泳競技における理学療法士の活動をより推進していきたい。



日本代表選手団
オリンピック 水泳飛込

桐蔭横浜大学

成田 崇矢



私は、オリ大会水泳飛込日本代表選手団（男子選手6名、女子選手5名、スタッフ6名）のトレーナーとして、選手村および試合会場（東京アクアティクスセンター）で選手のコンディショニングを担当した。

活動した期間は、2021年7月19日（月）に入村し、8月8日（日）（競技は7月25日（日）から8月7日（土））に退村するまで21日間に参加した。

オリンピックチームは、前年の11月から結成され、11月～7月まで毎月2週間ほどの合宿に計8回参加し、大会に臨んだ。

2月に開催される（実際は4月となった）ワールドカップにより出場資格が得られるまで、チームといえどライバル関係でもある事、コロナ対策により対面での関わりが少ないこと、開催されるかどうか分からない状況、東京オリンピックというプレッシャーは、選手、スタッフのストレスは大きく、その中でトレーナー活動は、いつも以上に心理的に大変であった。

大会期間中もコロナ対策のため、普段の試合よりも多くの制約があった。毎日のPCR検査は、もちろんだったが、何より試合が終了した選手は、会場から離れていかなければならず、残される選手は、体調管理、心理的ストレスは大きかったと思う。体調のコンディショニングはもちろん心理的なストレスを出来る限り、感じさせないように意識をして接した。素晴らしい大会会場で選手と一緒にウォーミングアップやトレーニングが出来たのは、いい経験であった。また、選手が個人種目で決勝に残り、会場中からスタンディングオベーションをされた会場にいられたこと。その後、選手が真っ先に私のところに来てくれて、泣きながら抱擁できたことは、トレーナー冥利に尽きる瞬間であった。

大会での主役は選手、監督、コーチであり、理学療法士やトレーナーは、そのサポートに徹することが重要であると思われる。その中で医師や他のトレーナーとの関わりは、理学療法士に求められる役割であるが、大会期間中のみならず、以前から構築しておくことにより、大会期間中も医師に適切な指示を仰げるなど出来ると思われる、水泳競技は、組織としてそのような仕組みが出来ていたが、他の場面においても重要なことであると感じた。

チームに関わった成果は、大会期間だけでなく、リオオリンピック後から4年間のチーム作りを近くで見れたことである。改めて、チーム関係者、職場の方々、この様な機会を与えて下さった方々には、感謝を申し上げたい。課題は、この経験を次世代につなげられるかという点である。そのような環境作りを今後、行っていきたい。

日本代表選手団
オリンピック ハンドボール

柏の葉整形外科
リハビリテーションクリニック

事柴 壮武



私は、男子ハンドボールチームのトレーナーとしてオリ・パラ大会の日本代表選手団に帯同した。コロナ禍で1年延期となったオリ・パラ大会。選手たちは思い通りの代表合宿、国際試合の経験ができない状況下であった。1月のエジプト世界選手権以降、国際試合ができなかったことは残念であったが、それでも3月から本格的に合宿を開始し、コロナ禍での厳格な感染対策下において準備を進めた。

大会中は選手村に入り、整形外科医1名、トレーナー3名のメディカルスタッフで対応を行った。スタッフ部屋のリビングおよび寝室スペースにポータブルベッド3台・電気治療器・超音波治療器1台ずつ配置しコンディショニングを行った。同部屋のため、メディカルチーム間の情報共有と意見交換が容易であった。1日おきに試合がスケジュールリングされており、試合開始時間が初戦（21時半）から最終戦（9時）にかけて徐々に早くなり、リカバリーの時間が最大13時間短縮されるというオリンピック特有の日程であった。そのため、対応として、リカバリーのためのマッ

サージでの利用が多く、大変重要な任務であった。入村直前にエース選手のハムストリングスの肉離れが発生した。開幕戦には間に合わなかったが、別メニューの調整を行った。選手村内トレーニング施設ではハンドボールの動きの確認は困難であったため、味の素ナショナルトレーニングセンターでの調整や国立スポーツ科学センターでの診察を併用しながらコンディショニングを行い、予定通り試合で活躍できた。開催国のアドバンテージを活かすことができたと思う。幸いにも大きな外傷は発生せず大会を終えることができた。また、選手村での生活は快適であり、組織委員会やボランティアスタッフの方々が献身的にサポートをいただいたおかげで、大きなトラブルも発生せず、安心安全に活動することができた。毎日のPCR検査については、2021年1月にエジプトで行われた世界選手権での経験（毎日鼻と咽頭からの2回検査で、結構な身体的負担であった）もありストレスなく行えた。

私は2018年から男子ハンドボール日本代表に帯同している。チームに帯同するなかで、チーム、選手のためによりよい判断、選択が求められる。そこで医療職である理学療法士の役割として「医師との連携」は重要になると考え、共通言語・共通知識を用いて、医師とのコミュニケーションを密に行ってきたことが、信頼につながったと考える。最後に、開催すらも危ぶまれたオリ・パラ大会でしたが、問題なく無事に大会を終了することができた。これは全ての方々のご協力があって乗り越えられたものであり、自身の活動も多くの方々の理解と支えがあつてのことである。自分一人では決してたどり着けないところで、感謝の気持ちでいっぱいである。そして、数多くの理学療法士が様々な形でオリ・パラ大会を経験できたこと自体が、一番のレガシーではないかと考えている。



日本代表選手団
オリンピック フィールドホッケー

山梨リハビリテーション病院
服部 潤



私は 2018 年 1 月のニュージーランドでの国際大会帯同をきっかけに 2019 年 1 月より今回のオリ大会までの期間、フィールドホッケー女子日本代表「さくらジャパン」のチームフィジオとしてオリ大会までの強化合宿等に帯同した。

スタッフはチームリーダー、ヘッドコーチ（以下 HC）、アシスタントコーチ、通訳、ストレングスコーチ（以下 SC）、アスレティックトレーナー（以下 AT）と理学療法士（以下 PT）のフィジオ 2 名がチームに常駐し、その他医師、栄養士、心理士によるサポートもあった。フィジオの主な役割はコンディショニング、テーピング、フィールドでの救急対応、水分補給、事故時の病院帯同、復帰へのリハビリテーションであった。フィジオ間での情報交換は勿論のことコーチ陣との密なやり取り、他スタッフへの情報提供など、何よりもコミュニケーションが欠かせなかった。選手たちは翌日の練習、試合に向けて如何に最善の状態に持っていくかについて繊細であった。治療やリハビリテーションの方針など資格の異なる 2 名であったため、互いの視点からの意見を出し合うことでフォローし合えた部

分も良かった点と言える。

HC はオーストラリア人、大会直前においてはスペイン人であったが両者ともフィジオの評価・意見を尊重し、医療に関することは私たち 2 人に一任して下さった。前 HC は起床時脈拍数、自覚的疲労度、睡眠時間等の基礎データにも関心を示し、当該選手の体調・心調など日々の変化についての質問も頻繁にあったため、信頼関係の中で仕事させてもらえる安心感と誇らしさがあった。また病院勤務では協働することのない SC と連携できた事も大きな学びとなった。GPS も導入され、蓄積されていくデータが今後のコンディショニングや障害予防に活かされる事を望む。

ホッケーでは硬性素材の道具を使用するため、骨折、打撲、切傷など外傷発生の危険を伴う。同時に、緩急のついた高強度の方向転換、サークル内での攻防から激しいコンタクト場面も多く、肉離れ、捻挫、靱帯損傷など軟部組織の障害も多い。PT の得意分野である解剖学・運動学を基盤にしたメディカルリハビリテーションの段階から、AT によるホッケー動作を加味したアスレティックリハビリテーション、そこに筋力・持久力などフィットネスレベルを底上げる SC の関わりと多方面から選手を支えられる環境であった。

チーム帯同の PT に求められる事として①役割、立場を理解した行動②コミュニケーション③PT としての確かな評価・徒手技術④寄り添いと安心感⑤冷静な情熱の 5 つを挙げたい。向き合う相手に敬意を払う態度は普段の診療と何ら変わりはない。これまでの人生を賭けてきた選手にとってオリ大会が如何に大きなものか計り知れない。特にベテラン選手にとっては経験豊富ゆえの悩みや大会後の人生など競技とは少し離れた内容も心を許して話せる存在でいられたと感じる。彼女たちの喜び、涙や挫折に寄り添ってきた日々は何にも変えられない貴重な時間となった。

日本代表選手団
パラリンピック カヌー

広島大学病院
坂光 徹彦



私は、パラ大会の競技会場ならびに選手村にて日本選手団スタッフ（カヌー）のトレーナーとして従事した。

大会帯同期間は、2021 年 8 月 27 日（金）入村～9 月 6 日（月）退村（競技は 9 月 2 日～9 月 4 日）であったが、直前合宿を含めると 2021 年 8 月 16 日（月）～9 月 6 日（月）となり、実際は約 3 週間であった。

事前合宿ではコンディショニングやケア、W-up やトレーニング指導、を中心に実施した。その他選手全員の体調面や外傷・障害の状況確認、村外スタッフとの連携確認や今大会重要であるとされた暑熱対策や感染予防対策を実施しパラ大会に備えた。

大会期間中は体調管理も含めたコンディショニングや練習後や試合後のリカバリーなどのケア、練習や試合前の W-up への対応、試合日以外に設けられたトレーニングの指導、メンタルケアや村外スタッフとの連携のためのスケジュール調整を行った。選手およびスタッフは毎日 PCR 検査を実施し、OCHA という体調登録アプリを事前に取得して記入するこ

とになっており、その管理の責任者も任された。

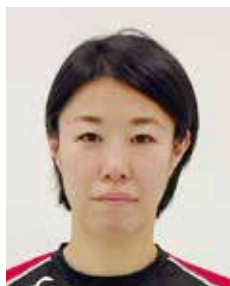
事前合宿で全ての選手と関わって現状を把握できていたことは良かったが、カヌーの日本代表選手は 6 名、日本選手団としてのスタッフ 3 名とその他コーチ 2 名、広報 1 名が村内に常駐したためトレーナーが 1 名しかおらず、全ての選手に対するケアのための村外トレーナーとの連携や選手とのスケジュール調整に労力を費やした印象があった。

コロナ禍という特殊な環境の中、日頃の練習や合宿から関わり、5 年間の集大成としての数日間にいかにパフォーマンスのピークを合わせられるか、またモチベーションを維持して、外傷・障害なく試合当日を迎えられるか、思うような結果が出なかった選手に対してどのような声かけをするかなど準備してきたはずであったが難しく、理学療法士としての知識や技術だけではなく時に心理、栄養、薬学、リーダーシップやマネジメントについてなど幅広い知識と技術が必要であると感じた。



日本代表選手団
パラリンピック 車いすラグビー

専門学校 社会医学技術学院
藤川 明代



私は、オリンピックでは選手村の総合診療所にて理学療法士として海外の選手たちに向けて理学療法を実施していた。パラリンピックでは車いすラグビーの日本代表トレーナーとしてチームに帯同していた。チームは理学療法士・カイロプラクター・鍼灸師・アスレティックトレーナーなど多職種が関わっている。東京パラリンピックに向けてはリオパラリンピック後すぐに次のチーム作りがはじまりメディカルに関してどの職種がチームにとって必要かバランスが良いかを4年間で模索してスタッフメンバーが決まっていた。日々の活動としては、選手の体調・外傷の管理や練習の補助・ケア・生活介助などである。選手には障がいがある為それぞれの障がい特性を把握する必要があった。排泄管理も含む体調管理は非常に大切で競技パフォーマンスに影響が出る1つの要因であった。また試合中はベンチに入り選手がコートで転倒した際に車いすごと起こし外傷がないかの確認を行った。ケアや水分補給をするためにどの場所でどのタイミングで可能であるかルールも把握する必要があった。理学療法以

外の知識も多数必要になることを実感した。職種の特徴から障がい者スポーツには理学療法士が関わるべきではないかと私は感じた。日本代表チームにて参加し銅メダルを取った瞬間は4年間の努力が一瞬で喜びに代わるような感情になり、言葉にならないようなやりがいを感じた。すべてが報われた気がした。理学療法士としての役割として「治療の技術」「医学的な知識」はもちろんであるがチームとして参加する際にはチームの一員として選手の士気を高めるような働きかけも必要であった。また国際的なイベントに関わる際には語学も重要であると感じた。オリ・パラ大会が日本で開催され障がい者が表に出る機会が増えたことは日本の社会にとってとても意味のある大会であったと感じた。今後もすべての人が平等に生活ができる社会を目指していきたい。

日本代表選手団
パラリンピック
車いすバスケットボール（女子）

茨城県立医療大学
橘 香織



このたびのオリ・パラ大会では、車いすバスケットボール競技に女子日本代表チームの特任コーチとして参加する貴重な機会をいただいた。特任コーチの主な役割はヘッドコーチが志向するバスケットボールの実現のための戦術立案と指導が中心であったが、今大会へ向けては新型コロナウイルス感染症対策とクラス分け再評価問題への対処も重要な任務となった。

新型コロナウイルス対策については、チームドクターと情報共有しながら、宿泊地まで移動や宿泊中の感染対策をトレーナー陣（理学療法士2名）と協力しながら進めた。クラス分け再評価問題とは、2020年1月に国際パラリンピック委員会より、今大会の車いすバスケットボール競技に参加予定選手が国際パラリンピック規程にて決められている10種の機能障害のいずれかを有していることの確認が求められた案件である。このプロセスをわずか4か月の期限内にドクターの診断書をもって証明することが世界各国で求められた。ちょうどコロナ禍の時期と重なり、緊急事

態宣言下で簡単に病院受診ができない状況の中、各地の医師とクラス分け委員、そして代表選手およびスタッフとの連携を取りながら、期限内にすべての再評価を完遂することができた。こうしたチームワークは普段からのチーム医療の実践が活きたと感じている。

車いすバスケットボールの指導においては、バスケットボールのルールや競技特性を知っていることはもちろん必要であるが、チーム戦術を成功させるためには、一人一人の動作能力を最大限に発揮するための車いすの設定や、その操作スキルを高めるためのトレーニングの実施は基礎として重要である。理学療法士として車いすに関する知識と調整の経験を有していたことは、当競技のコーチとしての仕事を遂行する上でとても役に立ったと考えている。また、フィジカルトレーニングのプログラム立案の基礎データとするために、試合中の運動率を分析したことも有用であった。

バスケットボールにおけるシュートは基本的かつ重要なファンダメンタルスキルであるが、そのスキル向上のために運動学習理論が応用できた。難易度の調整や文脈の中での課題設定、そしてフィードバックの量とタイミングのコントロールなど、自分が理学療法士として動作指導を行ってきた経験を活かすことができたと感じている。

車いすバスケットボールをはじめとしたパラスポーツにおいて、理学療法士はトレーナーやマネージャーとして参加することが多いように思われる。しかし、理学療法臨床における主訴およびホープの把握、課題の評価、目標設定とそこへ向けてのプログラム立案及び実施、といったプロセスは、そのままスポーツコーチングにおいても大変役立つものである。今後、是非多くの理学療法士の方に、理学療法臨床での知見を活かしパラスポーツの指導に携わっていただければ幸いである。



日本代表選手団
パラリンピック
シッティングバレーボール（女子）

広島大学

前田 慶明



この度、パラ大会にシッティングバレーボール日本代表（女子）のトレーナーとして帯同した。帯同期間は、2021年8月22日（土）～9月5日（日）（競技は8月27日（金）～9月5日（日））であった。

本大会に日本選手団の一員として参加することが決定し、これまでにお世話になった方々への恩返しとして本大会で結果を出すという強い気持ちで参加した。大会期間中もトレーナーとしての役割を全うすべく、選手の日々の体調管理や試合前のウォームアップ、試合後のクーリングダウンなどに加えて、新型コロナの感染予防への対策を実施した。

選手が試合でベストパフォーマンスを出せるよう準備をしてきたが、本戦第1試合目で外傷が発生してしまうというアクシデントが生じた。会場にいる医務班とともに対応し、帰村後も選手村の医務班やポリクリニックのメディカルスタッフのご協力をいただき、適切な対応を取ることができた結果、最後の試合では選手がコートに入るまでに回復することが出来た。

本大会で目指していた結果を残すことは出来なかった。この事実をまずは真摯に受け止め、次の国際大会への参加に向けて、さらに選手の身体の使い方や強化方法、動作指導を選手に伝えていかなければならないと強く感じた。

私にとって初めてのパラ大会であり、大変貴重な経験ばかりであった。既にアジアパラリンピックや世界大会が来年に控えている。今回の結果を次の原動力に変え、ご声援いただいた方々に結果でお返しできるように最善を尽くしたいと思う。

最後に、今回このような素晴らしい環境を提供してくださった大会関係者の皆様、いつも笑顔で熱心に対応してくださったボランティアの皆様に重ねて深く感謝申し上げます。

日本代表選手団
パラリンピック 陸上

明野中央病院

指宿 立



1986年学生時代、働く障害者の施設「太陽の家」で障がい者と共に就労とスポーツを体験したことがパラスポーツに関わるきっかけとなり、今日までライフワークとしてパラスポーツに取り組んできた。シドニーからリオデジャネイロとパラ大会に参加したが、今回のパラ大会の日本代表選手団、陸上競技 Team leader として参加したので報告する。

陸上競技は8月27日から9月5日まで167種目が実施され、トラックとフィールド162種目に1078名が参加し、最終日マラソン5種目に66名が参加した。

陸上競技の世界の競技力は向上している一方で、日本パラ陸上競技はロンドン2012大会とリオ2016大会で金メダルゼロに終わり、今大会では複数の金メダルを含む10個以上のメダル獲得を目標としていた。加えて新型コロナウィル感染症対策と暑熱対策にも取り組む必要もあり、これまでのどのパラリンピックよりも多面的に準備を要する大会となった。

パラ陸上日本代表選手46名の成績は入賞者数39、パラリンピック記

録4、アジア記録5、パーソナルベスト15、金メダル3、銀メダル3、銅メダル6で金メダルランキング20位、総メダルランキング9位であった。また競技前半の競技会場の気温は予想以上の高温となり、組織委員会の暑熱対策およびチームとして尿比重測定やポータブルファンやアイスベスト等の準備により、熱中症症状を訴える選手はゼロで暑熱対策は成功した。後半は雨天が続き、気温も20℃を下回ることもあり保温対策が必要となったが、東京の過去の気象データから気温低下は予測の範囲内であった。

新型コロナウイルス感染予防対策はPlaybookに従い、毎日のスクリーニング検査、組織委員会およびチームで準備した感染予防対策キットを活用し、感染者ゼロで大会を終えることができた。

最後にクラシフィケーションについて述べる。国際パラリンピック委員会のパラリンピッククラシフィケーションゼロポリシーにより、参加資格の一つであるスポーツクラス未確定選手の出場が危惧されたが、救済措置により陸上競技はクラシフィケーションが大会前に実施された。結果、メダル候補選手のスポーツクラスが変更となり残念ながらメダルを逃したが、当該選手およびスタッフは厳密にクラシフィケーションにのぞみ、スポーツにおけるフェアプレイの精神を体現してくれた。長年パラスポーツのクラシフィケーションに国際的に取り組んできたが、当該選手およびスタッフをあらためて誇りに感じた場面であった。

大会の開催にあたり国際パラリンピック委員会、組織委員会、日本パラリンピック委員会ははじめ、大会に参加した全ての選手、コーチ、オフィシャル、ボランティアのみなさまに心よりお礼申し上げます。



日本代表選手団
パラリンピック ゴールボール (女子)

加藤 瑛美

私は、今大会においてパラリンピックのゴールボール競技(女子)のコーチ兼トレーナーとして、参加した。ゴールボール男女チームのスタッフは、強化スタッフとして一本化されているが、大会期間中は男女チームが別行動となることもあり、女子チームに関わるトレーナーは選手村内で総務として動いているトレーナー 1 名、村外サポートとして男女ともに対応するトレーナー 1 名、女子チーム選手団内のトレーナー 2 名という体制(理学療法士 2 名含む)であった。オリ・パラ大会中の宿泊地はナショナルトレーニングセンターと選手村の双方を利用し、競技会場は幕張メッセ C ホールであった。参加国は 10 か国で、5 か国ずつの 2 グループに分けられ 8 月 25 日～30 日の間に予選総当たりを行い、各グループ上位 4 チームが決勝トーナメントに進み 9 月 1 日～3 日の大会期間を戦った。

事前準備として、チームスタッフや大会組織委員会をはじめ日本パラリンピック委員会など関係組織と連携し、大会規定となるプレー・ブックに則って練習環境や日常生活を送るよう徹底した。大会本番前、対外試合を

行った際も同様に、開催地のご支援のもと徹底した感染対策下にて競技以外では航路を含めた移動や宿泊地・食事会場を確保いただき、海外チームと試合を行った。オリ・パラ大会期間中は、ナショナルトレーニングセンターや選手村を活用し、それぞれにいるチーム内外のスタッフと連携し、感染対策を含めたコンディション管理やケアを行い、初戦から大会最終日の 9 月 3 日の 3 位決定戦まで戦った。大会期間、試合後やオフ日には、選手の試合出場時間や疲労度に合わせてケアやトレーニング、部分的な練習、疲労回復のためアクティブレストを取るなどした。基本的には選手自身が積極的に行動計画を立て、他に競技中の投球数など専門的な分析による客観的な数値も用いて評価し行動へと移した。大会前から予測される行動を複数パターン考え、周囲の施設やスタッフと連携しスムーズに進むよう事前調整を行った。また、大会中には序盤に捻挫のアクシデントがあり、その際は試合中の判断と応急処置、その後は選手団本部と連携し回復に向けたプログラム実施、患部の保護、まだ続く試合出場の可否の判断を行った。このような状況下で外傷により他選手の出場時間が極端に増加したこともあり、疲労回復のため臨機応変にトレーナー陣で対応した。

今大会は感染対策が徹底された中で実施され、競技ルールの一部変更もあった。しかし何事も事前準備を行うことで受け入れ、乗り越えられたと感じる。また今回は対応する機会はなかったが、試合中に時として出血を伴う外傷も起こるため、今大会のように感染対策に注目された中で正しく対応することも大切なことである。理学療法士として、選手の身体の動きを見ることはその技能を発揮する1つだが、現場特有の環境ではその洞察力を活かして、その場で起こりうる環境変化への対応や応急処置と判断も非常に重要と考えられる。

日本代表選手団
パラリンピック 車いすテニス

寛田クリニック

蛸江 共生

私は、パラ大会車いすテニス競技日本代表チーム付きトレーナーとして、2021 年 8 月 22 日～9 月 6 日の期間活動した。その間、チームの選手、スタッフの健康管理、選手のケア、コンディショニングサポートを主に行った。今大会チーム付きトレーナーは 3 名体制(男子、女子、クアード)となり、自身は主にクアードチームを担当した。大会期間中は、暑熱、天候不順による大会スケジュールの変更による長時間待機、深夜に及ぶ試合など、選手にとってコンディショニングの難しい中、トレーナー間で協力しながらサポートを行った。また、自身が一般社団法人日本車いすテニス協会(以下、「JWTA」という。)トレーナー部部長の立場であったため、今大会でのトレーナーサポート体制の準備として、大会期間中チーム付、会場フィジオ、村外サポート拠点、日本選手団本部、パーソナルの各トレーナーに選手が安心してサポートを受けることができる環境作り構築のため、トレーナー間で連携が図れる関係づくりを目標とし仲間と取り組んだ。実際、関係機関のご尽力の下、会場フィジオは JWTA トレーナー部スタッ

フ(理学療法士 8 名)をはじめとし、多くの理学療法士やトレーナーに従事していただけたこと、日本選手団本部、村外サポート拠点のトレーナーと前回パラ大会以降関係構築ができていたことは、選手サポート面での密な連携、情報共有が図れ、選手が安心してプレーに集中できる環境作りの一助になったのではないかと考える。また、暑熱対策では、日本テニス協会スタッフからオリ大会での暑熱対策の情報提供、物品貸与などのご協力もいただき、チームとして大変心強いものであった。今後も今大会で得た経験を活かし、関係機関、多職種との連携強化を図ると共に、選手サポートにおけるシステム強化を更に進めてきたい。最後にコロナ禍、我々が活動できたことは、多くの方々の支えがあった他ならない。全ての方々に感謝いたします。



その他
パラリンピック JPC 村外

日本パラスポーツ協会
荒谷 幸次



私は、パラ大会期間中、日本代表選手団本部村外支援スタッフとして活動させて頂いた。選手村内の活動期間は、2021年8月18日（水）～9月5日（日）であったが、大会期間前の直前合宿から、日本パラリンピック委員会（以下JPC）専任トレーナーとして、ナショナルトレーニングセンター（以下NTC）での直前合宿から選手団の全般的なサポートを行なった。

主な活動場所については、日本選手団本部トレーナー室であったが、選手や競技団体（以下NF）のスケジュールに合わせ、NTC、日本スポーツ振興センター（以下JSC）の村外サポート拠点やホテル JAL シティ東京豊洲で選手にコンディショニングサポートを行なった。日常にサポートを担当している選手に対しては、あらためて、試合前後のアクティブなコンディショニングやリカバリーの重要性を指導し、NF トレーナーと連携して取り組んだ。

本大会では JSC の日本選手団の本部支援として、オリンピック期間中と同様に日本選手団宿泊棟アイスバスの設置、運用にご協力を頂いた。入村してすぐに、移乗用ボードの取付けや浴槽への移乗の安全性を JSC 理学療法士の方と確認し、あらためて、パラスポーツでの理学療法士の必要性を再認識する機会となった。また、JSC 担当者とは、アイスバス活用方法など NF トレーナーから相談を受けた内容について、スムーズな運用となるよう調整、物理療法機器などのトレーナー備品については、JSC から借用の可否や必要物品など検討し本番を迎えることができた。その他、オリ大会期間中から随時情報交換を行い、滞りなく本部のコン

ディショニングサポートが展開できるよう JSC 及び JPC 事務局と調整を行った。

8月24日開会式の日までは、選手村と西が丘ハイパフォーマンススポーツセンター（以下 HPSC）をシャトルバスで行き来し、直前合宿中の NF スタッフに村内生活の様子や組織委員会の PCR 検査の実際及び JSC 村外サポート拠点、村内フィットネスセンターの状況など、情報共有を行った。ハイパフォーマンススポーツにおいては、多方面の組織が関わることになるため、組織間の連携が重要視されている。JPC 専任スタッフとして、各 NF ができる限り様々な拠点を活かすことができるよう調整役を心がけた。また、アーチェリー会場、射撃会場、車いすテニス会場を視察させて頂き、選手や競技会場のコンディションの確認や NF スタッフとの情報交換、会場医療体制の確認をさせて頂いた。今後のサポートに役立てていきたい。

現在、日常に西が丘 HPSC を拠点に活動しているパラアスリートが多くなってきており、本パラ大会メダリストの中でも JSC の直接的なサポートを受けている選手も少なくない。今後さらに同施設を利用する選手や NF が増えてくる可能性があり、JPC 専任スタッフとして JSC や NF との協力体制、連携の構築化の必要性を強く感じる大会となった。

最後に、自国開催であるパラ大会で理学療法士として活動させて頂き、大変貴重な経験をさせて頂いた。関係者の皆様に感謝を申し上げたい。



その他
オリンピック・パラリンピック
日本スポーツ振興センター村外サポート拠点

国立スポーツ科学センター

笹代 純平

私が所属する日本スポーツ振興センター（Japan Sport Council、JSC）ではスポーツ庁からの受託事業であるハイパフォーマンス・サポート事業として、オリンピック・パラリンピック競技会において日本代表選手がメダルを獲得できるよう、スポーツ医・科学、情報分野等からの高度なサポートを提供する体制を構築し、スポーツ庁が選定するターゲットスポーツのアスリートに対して、多方面からの支援を実施している。JSC 村外サポート拠点は、当該事業のひとつであり、ハイパフォーマンススポーツセンター（High Performance Sport Center、HPSC）などの普段アスリートが利用している活動拠点到類似した環境をオリンピック・パラリンピックの開催地に再現し、アスリートやスタッフが競技に向けて普段利用しているサポート機能の中から必要なものを選択することができるようにするための施設である。オリンピックでは 2012 年のロンドン、パラリンピックでは 2016 年のリオデジャネイロ大会から拠点の設置・運営をしている。このたび自国で行われたオリ・パラ大会では選手村や競技会場からほど近い湾岸地区に 2 拠点を設置して、これらと東京都北区の HPSC で日本選手団の支援を実施した。オリ・パラ大会を通じて多くの選手やスタッフが利用し、今回の日本代表選手団の活躍に少なからず貢献できたものとする。

私は主にこれらの拠点の治療（セラピー）と交代浴のエリアの事前準備や管理、運営に携わった。なおこれらの拠点では大会期間中に JSC の

職員だけでなく非常勤含め多くの理学療法士が勤務し、これらのエリアをオリンピック、パラリンピックのアスリートが安心・安全に利用できるよう業務を行った。拠点では感染症予防として密閉・密集・密接の回避やマスク着用、手指・器具の消毒徹底など日ごろから行っている対策に加え、勤務するスタッフの毎日の PCR 検査、村外サポート拠点スタッフによるセラピー対応時のゴーグル着用等を実施した。このような対策によって、オリンピック・パラリンピック期間中に村外拠点内でクラスター発生等が起きることはなかった。村外サポート拠点のトレーナーがアスリートのセラピーを実施する際は、日本選手団本部や各競技団体の帯同医師と連携をとることを徹底し、自国開催の利点を最大限に生かし、アスリートの要望や活動場所に応じて担当スタッフが拠点間を移動しながら臨機応変に対応した。

オリンピック終了後にはパラリンピックに向けてタイヤ・ハンドリムを消毒するエリアの設置、広い動線の確保、大型低床のプラットフォームベッドの設置、バスタブの配置変更と移乗台・手すり等の設置などのレイアウト変更等を行った。パラアスリートにこのようなサポート環境を提供するには、その障がいの種類や程度に応じて多様な状況を想定する必要がある、これは日ごろから障がいをもった人々が自立した日常生活を送れるよう支える我々理学療法士の強みが出せる点であると改めて感じた。



その他
オリンピック・パラリンピック
ドーピング

東京都立大学

信太 奈美



私は今回オリンピック・パラリンピックを通してドーピングコントロールという役割で活動した。私個人の活動期間はオリンピック、パラリンピックそれぞれにおいて開会式1週間前から閉会式までであり、活動場所は選手村と各競技会場だった。期間中は決められた宿泊施設に宿泊し、毎日PCR検査を行う感染対策がされた。

ドーピングとは、「スポーツにおいて禁止されている物質や方法によって競技能力を高め、意図的に自分だけが優位に立ち、勝利を得ようとする行為」のことである。禁止薬物を意図的に使用することだけがドーピングと思われがちであるが、意図的であるかどうかに関わらず、ルールに反する様々な競技能力を高める「方法」や、それらの行為を「隠すこと」も含めて、ドーピングという。アンチ・ドーピングとは、ドーピング行為に反対し、スポーツがスポーツとして成り立つための、教育・啓発や検査といった様々な活動のことで、世界アンチ・ドーピング機構が世界的なアンチ・ドーピングムーブメントを促進・調整・モニターする役割を担っている。日本においては日本アンチ・ドーピング機構が国内のドーピング検査やドーピングに関する啓発活動を行っている。検査に携わる検査員はドーピングコントロールオフィサー（以下 DCO）と呼ばれ、資格が必要である。資格取得には医療職である必要はなく、必要な講習と実際の検査経験を行うことで資格が取得できる。本大会に向けても多くのDCOが公募され、育成された。

本大会においては、海外から参加した国際的な DCO を合わせて 300 名ほどの DCO が任務に従事した。DCO は国内外を問わず一定の割合で医療職が活動しており、理学療法士も多いことが印象的であった。ドーピング検査には、大会などで行われる競技会検査とアスリートの住居地や宿泊場所、練習場で行われる競技会外検査があり、また検査の種類には尿検査と血液検査がある。DCO は各競技会場や練習場、選

手村等の滞在所で活動し、大会を通じて約 6000 検体が採取されたと報告された。

本大会に向けて協会主催で実施されたスポーツ理学療法研修会講習会では、アンチ・ドーピングについての講義をさせていただき、ドーピングとは何か、そのルールや検査について基本的知識について話す機会を得た。近年、医療機関だけでなく現場でトレーニングやコンディショニングに関わる理学療法士が多くなった一方で、日本の理学療法士にそのような知識はない。アンチ・ドーピングはトップアスリートだけでなくアスリートを目指す子供たち、彼らと日常的なトレーニングやコンディショニング、栄養管理などにかかわるすべての人にも必要な知識である。ドーピングコントロールの知識は参加するすべてのアスリートに関わる重要なことであるため、理学療法士がオリンピック・パラリンピックで活動するにあたり、基本的な知識として必要であった。今後もスポーツに関わる理学療法士には必要な知識であり、ぜひとも知識として更新し、サポートに役立てていただきたい。

一方、DCO の仕事はあまり知られていないが、スポーツを支える重要な仕事である。パラアスリートは様々な障害があるが、彼らに対するドーピングコントロールも障害のないアスリートと同じ方法で検査を実施する必要がある。しかし、先述したように検査環境は様々であり、障害も様々である。またパラアスリートでは排尿方法に道具を使用する場合があるため、障害のあるアスリートに対する対応はルールの範囲内での配慮が必要である。DCO は十分な講習を受けているものの、配慮に関しては医療職がバックグラウンドにある人の役割は大きい。理学療法士の知識も生かせる領域であるため興味のある人はぜひ資格取得をしていただきたい。

最後に、本大会をきっかけに国際レベルでスポーツに関わる理学療法士やパラスポーツに関わる理学療法士が増えてくれることを願っている。



その他
オリンピック
海外対応（ジャマイカ）

日本女子体育大学健康管理センター
野々山 真樹



この度、オリ・パラ大会のオリンピック期間中に、ジャマイカ選手団のメディカルサポートメンバーとして活動する機会を得たので以下に報告する。

開催国の医療従事者が他国選手団スタッフとして活動する機会は稀であり、まず、私がジャマイカ選手団サポートメンバーを担当するに至った経緯について説明する。2021年6月中旬に東京都理学療法士協会森島健会長宛にジャマイカオリンピック選手団チームのメディカルボランティアスタッフ募集の連絡が入り、スポーツ局板倉尚子局長経緯で私に打診があった。大会開催1か月前の急な依頼でありサポート期間や内容の情報が少なく、また私自身、外国語でのコミュニケーションに不安があり、躊躇があった。しかし、この絶好のチャンスに挑戦したい思いが勝りエントリーを決意した。人生初めの英語による経歴書を作成し提出したところ、2日後に正式な依頼がジャマイカ大使館からあり、アクレディテーションカード（資格認定証）取得のための手続きに入った。

7月21日水曜日19時、選手村アクレディテーションセンターゲストパスセンター前に集合し、ジャマイカ選手団メディカルサポートチーム（コーディネーター2名、ドクター2名、理学療法士1名、柔道整復師1名）が初めて顔合わせをし、入村手続き後に入村した。最初に選手村に足を踏み入れた時の感情は何とも言えないものだった。しかし、そのような余韻に浸っている間もなく、ジャマイカ選手団宿泊棟に向かいメディカルチームとの顔合わせを行った。ジャマイカメディカルチームはドクター4名、理学療法士2名、マッサージ師5名で編成されており、理学療法士との簡単な自己紹介後、直ぐにジャマイカより搬入した物理治療機器（低周波治療器、高周波温熱治療機器）の使用方法和治療対象の選手の競技・種目、頻度が多い外傷について説明を受けた。ジャマイカチームが携帯した治療機器は旧型であり、急性期対応、筋疲労や筋硬結、関節痛へより効果的な日本製機器使用を提案し快諾を得た。翌日には企業の協力を得て、

物理療法機器の借用と村内搬入の手続きを完了した。また、選手村内総合診療所（ポリクリニック）との連携を図るため挨拶を行い、他国選手団にスムーズなメディカルサービス提供をするための準備と環境整備を行った。

今回オリ・パラ大会は covid-19 の感染予防対策で、入村時に唾液による PCR 検査が義務付けられ、検査後にジャマイカ選手団宿泊棟のメディカルルームに在中し、選手のケアや治療、パフォーマンス向上などの理学療法を行い、ポリクリニックを利用する選手に同行し医療情報共有を行った。チームから競技会場への同行を求められたが、感染予防対策ルールにより競技会場への入館者数制限のため、許可が得られず、外傷を有する選手に競技直前のサポートが叶わなかったことに歯がゆさがあった。なお、ジャマイカの理学療法士の方々と、選手を介して治療に対しての考え方や手技などを共有する時間は有意義であった。日本でのスポーツ現場では鍼治療が多用されていると聞いていたが、理学療法士にその選択がないことを不思議に思っていた。また、姿勢分析やマニュアルセラピーなどは日本の考え方が細かい部分が多かった。また、ジャマイカではテーピングに対しても【固定をする】概念はあまり見受けられなかった。姿勢分析やマニュアルセラピー、テーピングの考え方など、拙い英会話であったがコミュニケーションツールを活用して共有できた。オリ・パラ大会が終わった今でも、ジャマイカの理学療法士と情報共有しており国際的な交流に発展している。国や文化の違い、教育が違っても選手を良くしたい、パフォーマンスを高めたいとか意見を出し合った日々はとても大切で、貴重な経験になった。

最後に、私にこのような機会を与えてくださった諸先生方や関係者の皆様に深く御礼申し上げます。



執筆者一覧（執筆順）

<大会組織委員会>

片寄 正樹 札幌医科大学
玉置 龍也 横浜市スポーツ医科学センター
遠山美和子 八王子スポーツ整形外科

<選手村診療所>

板倉 尚子 日本女子体育大学健康管理センター
佐藤 正裕 八王子スポーツ整形外科
来住野麻美 横浜市スポーツ医科学センター
唄 大輔 平成記念病院
加賀谷善教 昭和大学
佐藤友梨花 松田病院
永野 康治 日本女子体育大学
吉田 美里 八王子スポーツ整形外科
今井 覚志 慶應義塾大学病院
北山 愛萌 八王子スポーツ整形外科

<競技会場 オリンピック>

廣重 陽介 帝京大学スポーツ医科学センター
加藤 知生 桐蔭横浜大学
澁谷 利秋 藤沢湘南台病院
遠藤 浩士 伊奈病院
小山 智士
佐藤 謙次 船橋整形外科病院
岡田 亨 船橋整形外科病院
清水 結 とつか西口整形外科スポーツ医学センター
二神沙知子
鈴木 享之 長汐病院
川道 幸司 愛媛医療センター
河合 誠 札幌医科大学附属病院
粕山 達也 健康科学大学
宮下 浩二 中部大学
下田健一朗 静岡東都医療専門学校
千葉 慎一 ウェルケアわきた整形外科
嶋原 智彦 福島県立医科大学附属病院
樋口 拓哉 タムス浦安病院
水田 洋平 伊藤整形外科
渡邊 純 清泉クリニック整形外科
小山 貴之 日本大学

<競技会場 パラリンピック>

加藤 真弓 愛知医療学院短期大学
中川 和昌 高崎健康福祉大学
小林 敦郎 順天堂大学医学部附属静岡病院
赤羽 勝司 長野保健医療大学
豊岡 毅 西川整形外科
峰松 一茂 鶴田運動機能回復クリニック
赤岩 龍士 富士リハビリテーション大学校
田口 真紀 松本市役所
三星 健吾 北播磨総合医療センター
松元 春香 岡田整形外科
浦辺 幸夫 広島大学
田村耕一郎 広瀬医院
伊藤 弘崇 新渡戸記念中野総合病院
塚田 鉄平 旭川医科大学病院
久保下 亮 福井医療大学

<日本代表選手団本部>

鈴川 仁人 横浜市スポーツ医科学センター
鳥居 昭久 東京保健医療専門職大学

<日本代表選手団 オリンピック>

安東 映美 国立スポーツ科学センター
小泉 圭介 東都大学
成田 崇矢 桐蔭横浜大学
事柴 壮武 柏の葉整形外科リハビリテーションクリニック
服部 潤 山梨リハビリテーション病院

<日本代表選手団 パラリンピック>

坂光 徹彦 広島大学病院
藤川 明代 専門学校 社会医学技術学院
橘 香織 茨城県立医療大学
前田 慶明 広島大学
指宿 立 明野中央病院
加藤 瑛美
蛭江 共生 寛田クリニック

<その他>

荒谷 幸次 日本パラスポーツ協会
笹代 純平 国立スポーツ科学センター
信太 奈美 東京都立大学
野々山真樹 日本女子体育大学健康管理センター

2021 年度 オリパラレガシー編集作業部会

担 当 理 事	吉 井 智 晴		
部 会 長	小 林 寛 和		
部 会 員	坂 本 雅 昭	佐 藤 真 樹	信 太 奈 美
	鈴 木 享 之	鳥 居 昭 久	宮 下 浩 二
アドバイザー	梶 村 政 司	板 倉 尚 子	
事 務 局	石 田 英 恵		

理学療法士の活動

～東京2020オリ・パラ大会から理学療法士の未来に向けて～

2023年3月

公益社団法人日本理学療法士協会

オリパラレガシー編集作業部会